モノクロ

extrakaise

「僕にはね、見たいものがあったんだ。今となっては遠い昔のことだけど。僕の目がまだ見えていたときには見たいものがあったんだ。荒廃していく世界にあって、ただ僕の代りになってくれる人。もうどこにもいないけど・・・」

始まり

　洋食屋さんにランチ、ランチ、・・・。こころとランチ。すごく楽しみなのです。朝から嬉しくて。登校中の小学生に窓から「いってらっしゃい」なんて手を振っています。そしたら、小学生はみんな「いってきます」って当たり前のようにこたえてくれました。世界はきらきら輝いていますよ。
　久しぶりなのです。こころに会うの。それにランチに行くのも。
　昨日の電話。
　「明日ランチ食べに行かへんか」
　「いいよ」
あたしは一言。気がついたら「いいよ」って言ってましたね。
　どうしようかな。とりあえず、ワンピース着ていこうかな。迷うことはありません、直感ですよ。
　なんと、朝七時におきてご飯を食べてしまいました。いつもは九時まえにならんと起きないのに。昼おなかへってなかったら嫌やから。それから、少し運動して・・・、十一時には準備万端です。
　「行くよ」って、一声ある。こころが来ました。あたしは、縁側から顔を見せて、「今行く」こころは、「急がなくていいよ」って。でもあたしは、廊下を走ります。すこし息切れ、あたしの靴はどれかな。「かあさん、行ってきます」
　あたしは車の助手席に。広々広々。
　「何か聴く？」
あたしは、もちろん
　「あれよ、あれ」
　「そうそれやと思て、もってきた」
といいながら、こころは得意げに収納をさしてます。ひとつだけ、アルバムが入ってました。ベスト盤。
　「元気しとった？」
どうかな、あたしは元気だったのかな。こころは知ってるだろうけど。すぐは返事が返せません。まっすぐ、前をみたまま。
　「まあねぇ」
こころの横顔をちら見。少し痩せたのかな。ほほの辺りの肉が少なくなった気がしますね。それに、結構焼けてる。
　「なんか、面白い話してよぉ」
とりあえず、こころに振ってみる。
　淡いもない話、話。嬉しい。二十分がいとおしい。
　ランチは、何にしようかな。洋食屋さんは、カウンターに六席。二人がけのテーブル席が三つ、四人がけが一つ。小さな町の洋食屋さんです。仕事の昼休みのおじさん、カウンターに。年上のお姉さんたち、テーブル席に。主婦っぽい人たち、テーブル席に。あたしたちは、ひとつあいてた、二人がけのテーブル席に。
　店の前にあった、黒板見たときに決めました。「今日のランチ」は、オムライスなんですって。

「ランチひとつと、このパスタひとつ」
お嬢ちゃんが接客してくれます。
「ランチと、ナスとベーコンのパスタですね」
こころは、お嬢ちゃんの方ばっかりみています。あたしは、こころの顔を見つめています。
こころは出された、水をいっきに飲みほしてしまうと。
「水ください」
レモンの香りがする水。こころは、ごくごく飲んでいく。のど元には汗が、つぶつぶとついてる。おしぼりで、ふきますよ。拭き拭き。黒く澄んだ瞳に、何が写っているのだろうか。知らないねぇ。女の人しか、写ってないように見える。でも、それだけではない気もする。どうなんだろう。そんなこと、聞けないけどね。こころの世界は分からない。どこにあるのか、わかんないから。こころの見るせかい、知らないよね。お嬢ちゃんに、こころは微笑んでます。お嬢ちゃんも微笑みかえしてます。やっぱり、女の人しか写ってないんだろう。
「どこみてんの」
ゆっくりと、言ってみる。
「あの子、かわいいね」
だってさ。やっぱりね。
サラダに、スープに、アイスティーに、オムライスに。
「ここって雑誌に載ってんよ、知ってた？」
「そーなんや」
やさしく、返したら、こころがパスタを食べ始めた。一口食べると、顔がゆるんでいる。ほんとにおいしそう。眺めてたら、「食べる？」って言ってくれた「いや、いいよ全部食べ」こころは優しいね。
こころはやさしいね。ほんとに、やさしいね。
「少し痩せたんやない？」
「そー？」
少し嬉しい。あたしのこと見ていてくれたんだ。それが嬉しい。言葉が乾かぬようにと。
「結構、焼けてるね」
と続ける。こんな風な言葉のやり取りが、そのうち答えを出してくれる。それがなかなか実感できない。世界はいつも、答えを求め続けている。その答えは、だれが出すでもない。ただ、常に答えようとする。そういう姿勢。見えぬものこそ。言葉に上る。見えぬものこそ、見えぬものこそ、発せねばならない。そう思うのはあたしだけだろうか。なぜ、時代は変わらねばならなかったのだろうか、それは夢。
「あたしとキスしてみる？」
何いってんだろう。こんなこと言っても、アハハってこころは笑うだけなのに。アハハ、って笑いながら、
「それもいいかもね」
越えるべきものは、それゆえに、願われるもの。
目に写る色、おいしそうな色。卵の黄身の色。ふわふわした色。ケチャップの色。サラダにザックとホークをさしてつかみ、口に運ぶ。しっかりとした水が口のなかに広がる。シャキっていう感覚。メインをスプーンで口に運ぶ。甘い感じが、伝わってくる。黄色の下には、何があった

のだろうか。嬉しいな。こんなにおいしいの食べれて。あたしは料理の方を意識してみている。こころの方を見ると、何かしゃべらないといけない気がするから。だまーって食べる。言いたいことがあるというより、こころと何か話したいそれだけ。でも、沈黙もいい。こころは、お嬢さんの方をたまに見ながら、もぐもぐ食べている。
「水ください」
こころはよく水を飲む。水がすきなんだってさ。ただ、だしね。
水の入ったグラス、そのグラスの中をまじまじと見つめる。
水好きなんだってさ。それも言葉だよね。こころについての言葉が嬉しい。こころが分かった気になるから。なんとなくだけど、好きです。やっぱり、言葉を信じるしかないよね。それが言葉ですから、黒い本に書いてる言葉ですから。こころ、あたしにも言葉分けてください。「あー、また変なこと考えてしまった」あたしは、少し遠くを見ていた。
「かわいいね」
こころは、頭をなでていた。でもなぜかこころは窓の外を見ている。あたしはここにいるよ。
目を閉じて、開けてみると、少し眩しい。世界にはわずかにしか色が無い。こころの顔が白黒。どこみても白黒の濃淡だけの世界。夢と現の間で、漂う思考。世界の果てはここにあるのか。覚めながら、夢を見ることができたら、それが本当の言葉になる。世界はいつも巡っている。その答えを知らないだけ。細い線は、あたしとあたしでないものを分けている。あたしは一体どこにいるんだろう。
こころの手があたしから離れる。色つきの世界に戻る。
「ご馳走様でした」
両手を合わせて、目を閉じお辞儀をする。何かに感謝する。あたしは、無意識にそうしている。でも、なぜって聞かれたら、答えられないよね。それがほんとうのところ。こころは、手を合わせるだけ。口の周りをぬぐうと、水を一口含む。
「行こうか」
「そーやね」
あたしは、うなずく。こころが千八百円払う。ごちそうさまです。

一

　表紙の黒い本。ハードカバー。あたしは左手を思い切り開いて表表紙にのせる、ちょうど手が収まる。手のひらがすいつく。汗のせいかも。親指を背表紙にかけて、背が上になるようにおこす。不安定で、手を放すとすぐに倒れてしまう。トンと、表表紙が上になる。クルクルクルと本を回転させる。手を放しても本はクルクルと回ります。一回転。すぐ止まってしまうけどね。あたしは、止まる度に回します。テーブルの上を本がクルクル回ります。あたしの書いた言葉が回ります。あたしの書いた言葉がクルクル回ったらさすがに読めないですね。なんとも文字とは動きに弱いものです。なんともあたしは、動きに弱いものです。十分の一くらいのページには何かが書いてある。その文字がクルクル回るのです。
　ピタッってあたしの方を向いて止まった。あたしは黒い本を頭に載せてみる。落とさないように、まっすぐ前を見る。こんなふうに本を頭にのせると、その本に書いてあることが全部覚えられるんやったらいいのに。そしたら、テストなんか楽勝ですよ。頭にのせてバランス、バランス。意外と落ちてこないものです。意外です。
　「お風呂、先にはいるで」
かあさんが、立っています。あたしの方を見ながら、もう一言
　「あんた、何しとるん」
不思議そうな顔をしています。
　「こうしたら、ちょっとは頭よーなるかと思って」
なんて、あたしはくだらないことを言います。
　「ふーん」
興味がなさそう。
　「馬鹿にしとるやろ」
　「先、お風呂はいるからな」
　「どうぞ」
　少し頭を下げて、黒い本を、キャッチ。
　あたしは書いていく。リズムに乗って、一字一字書いていく。書くことであたしと対話する。書くことで、人の言葉と対話する。会話の中のひとつの言葉について思考を巡らす。書きながら考える。あたしの頭の中を知ろうとする。地球はひとつの丸い球。球の表面はどこが始まりでどこが終わりでもない。あたしの頭の中もそれと同じ、始まりも終わりもなく、どこでも同じでどこでも一緒。ただ、その球の表面を散歩するだけ。書くということはそういうこと。あたまの中という球の表面をぐるぐる歩きまわること。楽しいこと、怒ったこと、嬉しいこと、悲しいこと、そんなのが点々と球の上に散らばっている。
　黒い色があたしの言葉を留めてくれる。それが美しいこと。今日のランチの楽しさを書こうと、ペンを握り締めた。こころに頭を撫でられたときのモノクロの視界が見えてくる。この世界は白と黒でかたどられている。
　「この世界には白と黒のモノクロ。それがほんとうのところ」
つぶやいてみるけど、あたしの言葉になってない。とりあえず、書いておこう。
『この世界には白と黒のモノクロ。それが本当のところ。』
　「おふろ、あいたから、はいりなよ」
かあさんの声だけがする。あたしは

「わかった」
と少し大きな声でいう。かあさんの足音が遠のいていく。あたしは黒い本を閉じて、風呂場へ向かう。
湯船につかりながら、言葉が巡るままに任せてみる。目の前は湯気でくもっている。モノクロの世界が巡っていく。いま目に見える世界と、今日見たモノクロの世界が渾然一体となって、辺りを漂っている。
「みえることは、ほんとうにある存在。存在は白と黒でかたどられている。世界に終わりはない。その答えはどこにもない。あたしはしらない、言葉の意味を。訳の分からないことばかり言えばいい。それがいつか言葉になる。それがいつか、答えになる。いまはわからなくていい。そのうち分かるから。そのうち答えが言えるから」
何を言っているのかあたしも分からない。どこかにある言葉を適当に羅列しているだけ。辺りを漂うものに言葉を忍ばせる。考えてなどいない。ただ、口にしただけ。
「あたしって、なんなのだろう」
右手ですくい、指の間から零れ落ちていく音をきく。無色透明なお湯がおちていく。湯船にかえっていく。
四方八方を塞いでいる壁、扉、窓。区切られた空間にあって、あたしは安心している。ここが風呂場だから。曇ガラスの向こうには、夜の闇が広がっている。
目を閉じれば、感覚が増す気がする。皮膚に触れる感覚が研ぎ澄まされる気がする。目でなく、皮膚が感じている。この気持ちよさを。世界はモノクロではない。世界は色つきでもない。目を閉じれば、何もない。世界はあたしの皮膚に触れる、お湯、空気。それが世界。

冷蔵庫をあけ。オレンジジュースをとりだす。カップにいれて飲み干す。体の中を流れているのが分かる。

二

　朝起きると、ご飯を食べる。それは生まれてから変わらない。朝ごはんを食べると、少し眠くなる。縁側で一休み。柱にもたれて目を閉じる。うとうと。
　「コレデフクデモコウテキ」
かあさんが何か言っている。あたしは、ゆっくりと目を開け声のするほうに顔を向けた。目を閉じてた方が思考が早く巡っている気がする。目を開けると、考えるのが少しゆっくりになる。どこかをあたしは見ている。棚の上にはお札が載っている。目を閉じてかあさんの言った音声をゆっくりと、リピート。「これで服でも買うてき」なるほどね。ここまで何秒かかったのだろうか。かあさんに返事をする。
　「わかった」
という具合に。
　分かってないのに、分かっていることがある。言葉にならないだけで、あたし自身は分かっているんだ。言葉になっていないだけ。ただそれだけのこと。先が読めているとかそういうことではない。言葉でない感覚で捕らえているだけ。いつからだろう。こんなのは、音の後に、言葉がくる。もっと早く言葉になれば、すぐに返答できるのにね。
　電車に乗るくらいの外出は久しぶり。何買おうかな。わくわく。服を買ってないよね。まあ、家にいるだけやから、そんなに服は要らないのですけど。でも、やっぱり無いよりはあるほうがいい。どんな服がよいかな。どんな服があるのだろう。まったく浮かびませんよ。行ってみるしかないってことかな。そう、そこにある服買うだけだしね。無いものは買えないしね。
　ガタンゴトン、電車に乗っています。シートの感じが久しぶり。前、乗ったのは最後に予備校に行ったとき。六月一日。それから電車には乗ってません。二ヶ月くらいか。車掌さんが、通っていきます。
　「すみません」
呼び止めます。切符を買わないとね。切符ですよ。切符。あたしの声が小さくて、あたしの動きも小さくて、車掌さんはあたしの前を過ぎ去っていきます。ああぁ。あたし駄目かな。まあええか。降りるとき払うことにしよう。やっぱり空いているな。十時過ぎ、この時間は空いている。朝と夕方はこむけどな。通勤通学。当たり前か。あたしは、その当たり前から遠のいています。ガタンゴトン、ガタンゴトン。どんどん電車は進んでいきます。高校生の時はこころを追いかけていました。行きの電車に、帰りの電車に。高校で。こころは、あたしの二つ上だから、一年生のときのことだけど。こころは電車のなかで勉強もしてましたね。受験生やったからね。あたしも、勉強してみたけど、からっきし、駄目でした。朝の電車はこころもあたしも乗る場所は大体決まっていた。こころと違う車両に乗りますよ。あたしは小テストの勉強をします。こころは何していたんでしょうか。やっぱり小テストの勉強かな。帰りは、こころが一人であたしも一人の時だけ一緒に乗ってお話していました。時々あったよな。嬉しかった。家までずーっとこころと一緒だったから。何を話していたんだろう。何を話していたのかな。たわいも無い話だったのかな、忘れているな。何はなしたんだろう。楽しかったのは覚えているよ。あたしの右側にこころがいたから。嬉しかったな。嬉しかった。
　窓の外を眺めて見る。見慣れていたはずの景色。体が覚えている。山がいつも側にある。一駅二駅・・・全部で十駅。知らない人しか乗っていない。知らない人だから安心できる。知っている人だと嫌われないようにしないといけないから、どぎまぎしてしまうだろう。気付いていても

、気付いていない振りとかしないといけないから。疲れるよな。そんなことしたら、その日はそのことしか頭に浮かばなくなるし。

ガタンゴトン、ガタンゴトン。終点間際、最後の楽しみは、ニコホンテンです。ニコホンテンってなんなでしょうか。あたしは、振り向いて窓の外をみる。電車の窓からしか見れない奇跡の看板。線路に面した工場跡の外壁にかろうじて残っています。変な顔のロゴのよこにニコホンテンの文字。いたってシンプル白と赤の二色だけ。でも看板はさびの色に食われています。「あっ角が折れてる」良く見れば長方形の角が折れてンの文字が見えません。ニコホンテだってさ。でもやっぱりへんな顔。あたしはニヤリ。見れて良かったな。そういえばお守りみたいな感じ。そんな感じです。今日からはニコホンテですけど。

知らないところは歩かないね。昔歩いたことのある道しか歩かないね。不安だから。そう、不安だから。

あたしは言葉 が流れていくのが好き。本なんてたくさんあっても、あたしの中を流れていかない。あたしが読まないと流れていかない。一冊の本を手に取る。棚の一番下の段 にあるから、しゃがんで取る。楽しい言葉が書いてあればいいな。ペラペラ捲って適当に読んでみた。あたしの体に馴染みそうもなかった。

「これはやめよう」

立ち上がって、 平行移動。なんかいいのないかな。「インフレーション宇宙論では、宇宙は究極の無料ランチと言っても過言ではない。 – アラン・グース」次に手に取った本にはこんな風に書いてあった。なんのことだろう。無料ランチなんてすごくそそられる。無料でランチが食べ放題。とりあえ ず、手に持っておく。またまた、平行移動。平行移動。結局、三冊かった。一冊は漫画本だったけどね。

行く当ては無 いけど、本屋さんをあとにする。どこに行こうかな。じーっとつっ立っているのは不自然やからとりあえずゆっくり歩いてみた。何処に行くのだろうか。思うと ころがないのは少し不便だ。見たことのあるところを歩いてみる。だれか知り合いに出会うだろうか。出会っても、声はかけないでおこう。何でかな、なんとな くかけないほうがいい気がする。あたしは立ち止まる。綺麗なお姉さんが歩いていく。どこかで見たことがある気がする。道を挟んで向かい側。何処で見たのだ ろう。信号が赤、車が次々に走っていく。どこかで見たきがするね。思い出せない。お姉さんはどこに行くのだろうか。あたしは目で行く先を追う。少しずつ小 さくなっていく。小さくなっていく。あたしの前の信号が青になった。やっとわたれますね。なぜか後ろめたいけど、お姉さんの後を追ってみた。どこに行くの だろうか。どこに行くのだろう。角を曲がる。あたしは少し早足になる。お姉さんを見つける。よかった。お姉さんはどうやら駅へ向かっているらしい。だんだ ん追いついてきた。後姿も鮮明になる。ふとあたしは呟いた「海南そっくり」そうだ、カナだ。道理で見たことあるはずだ。あの歩き方は海南ですね。なんで歩 き方で分かるのだろうか。癖が言えるわけでもないのに。雰囲気というか、歩き方全般というか。そんなところかな。海南とは高校が同じだった。同じだっただ けかな。大して話したことはない。なんで知ってるかって、海南が美しいからですね。何ていうの、和とか凛とか、そういう言葉が似合っている。こころも言っ てたよ「あの子かわいいね」とか、何とか。電車でよく見かけたから。そういえば誰かが言ってたな。海南はこころのことが好きらしいとかなんとか。どーでもいいか、そんなこと。

さて服でも見に行くかな。

店の前。中を少し覗き見る。まだ早い時間なので、お客さんはいないね。そーっと入っていく。そーっと。綺麗にたたまれた服が、幾何学的にならんでいる。まあ、幾何学的っていっても四角形が幾つか並んでいるだけだけどね。

「背高いね。」

横からの声。あたしの顔が曇ったの。横を見る。答えが返せない。

「ソノシャツニアウトオモウヨ」

とっさに、続けてそういわれた。何ていったんだろう。音しか拾えなかった。

「何言ってるんですか」

慌ててそんな風 に口走った。何あたしは、言っているんだろう。聞き取れなかったから、「何ですか」と言えばよかったのに。「何言っているんですか」は無いよな。相手の顔 が曇っている。あたしの顔は引きつっている。沈黙が流れる。ただ、あたしは商品の方を向いている。店員さんのことが気になってどうにもならない。何かしゃ べりかけようか。でもこの人とは、上手く話せ

ないだろう。そんな気がする。なんか、あたしでないあたしがつくる空気、これはいい訳か。あんなこと言うつも りなかったのに、言ってしまった。なんか上手く答えられない。何か言おう。言葉が浮かばない。

「また、来ます」

そそくさと、店を後にする。欲しかったのになぁ。あたし、少し凹みました。あたしは嫌われるのがいやなのだ。それだけのこと。まあ、タイミングが悪かっただけ。

帰りの電車。本を広げるけど、音以上にはならない。言葉が体をいつも以上に素通りしていく。何を読んでいるんだろうか。おもしろいのか、おもしろくないのかそれすら分からない。
ふと見れば向こうに海南が座っているのが見える。本を見ながらも、海南の方をちらちらと見る。そうそう、座るとあんな感じ。広く広く広がる感じ。そうこの位置感覚、あたしが扉にもたれていて、海南が右斜め前に見えている。そしてあたしの右側にはこころがかすかにいる。そうこころがいたんだ。この場所はこころがお気に入りの場所。こころがいつもここにいたからあたしもいつもここにいた。そしたら、海南が右斜め前に見えていた。海南の横には微かに誰かがいた。だれだったろうか。忘れたな。海南のお姉ちゃんかな。そんな気もするけど何か違う。海南にお姉ちゃんいたっけかな。いつかの記憶。あたしの位置は昔とさして変わっていない。気がつけばここにいる。海南も同じなのかもしれない。あの位置が海南の位置なのかもしれない。次の駅で海南は降りていく。あたしの横を通り過ぎていく。あたしは微笑むのだろうか。それとも気がつかない振りをするのだろうか。どっちでもいい。どっちでも同じ。ここがあたしの位置で、海南の位置があそこなだけだ。あたしは、本に目を落とす。言葉がちゃんと体を巡っていく。音が、意味をなしていく。あたしの頭が分かっているよと教えてくれた。
「こんにちは」
海南があたしの前にいる。なんだか不自然な位置関係。
「サクラだよね」
海南はあたしに確認をした。
「そうだよ、カイ」
とっさにそう答えた。そう、海南はなぜかカイって呼ばれてたんだ。カナでも音の数は変わらないのにね。カイ、カイって呼ばれてた。あたしのなかでは、カナですけど。だれかにあわすとカイになる。あたしは誰かに合わしている。
「遊びに行ってたの？」
海南はそう言う。あたしは、
「まあ、そんなところ」
そういう風にして誤魔化す。
「予備校来なくなったね」
いきなり核心に迫ることを聞いてくる。
「なんかね、疲れるから」
そんな風にしか答えられない。
「大学受けないの」
「どーかな」
どうして、こんなこと話すのだろうか。海南は。あたしとさして話したことなかったよな。なのにどうしてかな。最高でも挨拶程度かなと予想していたあたしの考えは崩れてしまったわけだ。これから、どうなるんだろうか。
「サクラちゃんて綺麗だよね」
海南にそんなこと言われても、素直に喜べないよな。あたしは正直に
「カイにはかなわないよ」
目をそらしながら答えた。嘘は言ってないけどね。
「そんなの嘘」
海南は目を細めながらにいう。目を見たけど、本心らしい。左目で見たから確かなことだ。何

でかって？そんなの感。あたしは、持っていた本を閉じる。海南は沈黙。電車は次の駅へ向かっている。あたしは足元を見ながら、何を言おうかと思案する。海南は外の景色を見ている。もうすぐこの沈黙も終わるはず。
「今から遊びに行ってもいい？」
「いいけどべつに」
なぜだかそんな会話をした。まだ、昼過ぎたところ。
海南の車にのってあたしの家までいった。免許取たて。初心者マークがついている。少し不安だったけど、海南の運転は別段普通だった。
「カイ、カナってよんでいい」
そんなあほなことを聞いているあたし。
「どっちでもいい」
道はあたしの家へ続いていく。どう考えても、一本道、道なりに進んでとしか言いようが無い。信号はもう無いね。
「車の免許いつ取ったの」
あたしは海南に聞いてみた。
「少し前」
少し前ですか。何を聞けばいいだろうか。海南は何を答えてくれるだろうか。沈黙。沈黙。
「そろそろ家やから」
そんなことしか話すことはない。なんで一緒にいるのだろうか。まあこれもいいのだろうか。沈黙が続けば焦ったりした。何か話さねばと思っていた。でも、沈黙でいい。それに今は焦ってはいない。
家には誰もいない。海南はあたしの後を着いてくる。
「あたしのうちは何もないよ」
とりあえず、そんなことを言ってみる。なんでこんなことを言うのだろうか。
「そーだね」
海南は縁側に腰を下ろしてそう言った。海南は遠くを見ていた。海南は近くを見ていた。
「予備校はもう行かないの？」
「行くかもしれんけど」
曖昧な返事。
「何で？」
「いや、何となく聞いてみただけ」
「海南は勉強せんでええの？」
「今日は勉強しない日なの」
「そんな日あるんや」
「そう週一日」
あたしは、台所にいく。冷蔵庫の中にあったスイカを取り出した。丸い球の四分の一。ラップをはずして、小さく切る。スパンっていい音がした。お皿に入れて海南の所へ持っていく。
「これでも食べて」
そういって置く。あたしは、ひとつのすいかにかぶりつく。すいかをはさんであたしは座る。
「いっつも何しよるの？」

海南がたずねる。
「何しよるんやろか、何となく一日が過ぎる」
「楽しい？」
「どーやろ、どっちかといえばつらいかな」
「ふーん」
海南は、すいかをかぶりつつ、遠くを見ている。
「このすいか、あまいね」
「そーやろ」
海南の方をみて頷く。あたしは、少し嬉しい。特に話すこともなく、特にすることもない。なんとなく、沈黙。予備校に行っている知り合いの事なんて聞きたくない。勉強のことでも聞いてみるかな。最近調子はどうなのとか。それにしても、海南は綺麗だよな。
「する事、ほんとうに無いね」
「そうだね」
あたしは海南と少し笑いあった。同じ意識を共有できたような気がしたからかな。しゃべらないと、人が何を考えているかなんて分からない。あたしは分からなくていいと思うけど、でも沈黙によって人に嫌われてしまうのは嫌だ。でも、人とはあんまりしゃべりたくはないよね。何か矛盾してるような気がする。海南は沈黙に耐えることのできる人だった。そういえば、沈黙が続いている割にはあたしに焦りが少なかった。話すことは無いけれど、かといって話をしないことが苦痛になるわけではなかった。そんなこんなだけど、あたしは疲れていた。
海南は、かばんの中を漁っている。
「少し勉強するわ」
そうして、海南はいそいそと勉強をはじめた。あたしには浮かばなかった選択肢。不思議なことに、それがごく当たり前のことに思えた。海南は本を出して読んでいる。あたしは、少し眠ることにした。出かけて疲れたのもあるし、沈黙が続くのも気にかかるから。
記憶は遠のいていく。どこにあたしはいるのだろうか。いつかの声が聞こえる。どこにいるのだろうか。答えは聞いてない。
声が聞こえる。だれの声だろうか。とうさんの声？いやちがうな、たぶんこころの声だ。縁側にはこころが座っている。何をいっているのだろう。
「サクラいます？」
「こころさんですよね」
「そうですけど」
「始めましてでいいのかな。きょうちゃんの従姉妹の海南っていいます」
「きょうちゃん？」
「高校のとき同じクラスやったと思うんですけど・・・」
「ああぁ、京子ね、へぇ、従姉妹なんや」
「で、サクラとも友達ってわけね」
「まぁ、そんなとこですよ、サクラはこのとおり、昼寝中なんで・・・」
「そーか、まぁええか」
こころと海南の間にも沈黙が流れる。
「京子と従姉妹なんや」
「そーです」

「どうりで美人なわけや」
「そんなことないですよぉ。でも、きょうちゃん、綺麗ですよね、それに面白いし」
「そうそう、面白いよな。しゃべらんかったら、もっと美人にみえるのに、あいつはそんしとるよな。へんなこと平気で言うし」
「そう、言いますよね」
あたしは、音に聞いているだけ。何を言っているのかさっぱり分からん。
「海南でいい？」
「うん、ええよそれで」
「変なこと聞くけど、海南はなんで勉強しとるの」
「それは、いまここで何でしてるかってこと？」
「いいや、そうやなくて、勉強する意味みたいなこと」
「どーかな、どーかな、勉強する意味か・・・。なんとなくはあるけど、言葉にはしたことないな。どーかな、どーかな。美しい人になりたいから。魅力的な人になりたいから。そんなところかな。こころさんはどーなのですか」
「うーん、こっちの場合は、なんとなく。人よりも偉そうにしてたいからとか、答えるかも。でも、大学の授業なんて、なんていうのかな。眠たい。受験の時みたいに、焦りとかほとんどないし、それに、先に何があるのか全く見えないから、もう、行き止まりみたいな気がする。勉強しても意味が無いっていうか、そんな風に思えてくる。だって、訳が分からんのよね」
「それって、こころ。こころでいいですか」
「いいよ、そのほうが嬉しい」
「こころのせいでしょう。そんな、大学なんて誰かの言うとおりにして、学ぶところじゃないし、授業なんて先生の趣味みたいなものでしょう。それに、何かを覚えることより、何かを表現するためのところでしょう。文章書いたりして、だれかに伝えること、取り入れることより、外に出すこと、そういう転換をするところではないんですか。そんな風に思っていたんですけど。意味がないと思うなら、こころにとっては意味が無いのではないのかな。それに、それに、訳が分からんのは当然でしょう。先生の話す言葉なんて、専門用語なんだし、そればっかり勉強してはるのに、分かるわけがないよ。そうでしょう。ちがいますか」
「そーか、でも・・・」
「あたしも本に書いてあったこと真に受けてるだけやけど・・・」
「不快ね。深いね」
「あたし、魅力的な人になりたいの。魅力的な人に。そういろんな人を引き付けるような人になりたいの」
「それで、勉強してるんや」
「そう、教養が無いと、息子に馬鹿にされたら嫌やから」
「なに？息子って」
「将来の話、子供がいてそれで、その子に馬鹿にされたら嫌やっていう話」
「そういう話か」
「こころの子供でもいいよ」
アハハ、何言ってるのだろうかこの子は。目は真剣でいるようで、前のめりではなく、少し引いている。目に感情を引き付けている。
「さあ、それで」

「勉強して魅力的な人になるんだ、それが勉強する意味」
「知識だけなら図書館行けば盗めるよ、そんな大学いかんでも」
「それはそうかもね、でも、そんなにあたしは強くないから」
「そうですか。この話、止めよか」
「うん、そうやね」
音は溶けて、風になる。音は弾けて、あたしにぶつかる。あたしにとって、意味のある言葉はあるのだろうか。全て均一になってしまうから。あしたより、きょうがいい。
海南はそんなに背が高くない。あたしより低い。でも、そんなに低いわけではない。平均ぐらいなの。あたしはそれより、少し高いほう。人は見る、海南のことを、あたしも見ていたんだね。だから、知ってたんだ。いろいろ人づてには聞いていた。海南のこと。
あたしは疲れて、疲れて、疲れて。
「あたま撫でていい」
「いいですよ別に」
「やっぱり・・・」
「聞いていたとおりやね、ほんとに白黒になるんや」
「京子に聞いたんか、そうか・・・」
音は再び消えていく、そしてグルグルあたしの中だけを巡っていくんだね。これからはあたしの知らない話。
「ねぇ、あたしのカナって漢字で書くと海、南って書くんだよ」
「海と南で、カナ？海をカって呼ぶんだ。少し変わってる。でも好きだな、そういう名前。海の南か。こっちなんて、漢字で心って書くだけだ。」
「こころって、なんか女の子みたいな名前やね」
「それは、言わんで。気になるところやから。よく、間違えられるから」
「海南っていう名前、始めからカナって読めるひとは少ないよ。ミナとか言われるし・・・。」
「そのたびに、カナですっていうの？」
「いいや、ミナでもいいかなって、そのまま流すね。それも魅力的かなって思うしねぇぇ」
「ねぇぇ・・・か。そういえば、サクラはいつから寝てるの？」
「うーん、一時間くらいかな。すごく疲れてたみたいで」
「それで、ひとりで勉強してるんや」
「まぁ、一応受験生やから」
「がんばりよ。またね、海南。サクラによろしく」
「またねぇ、こころ」
見えたことは、海南の姿。教科書を読んでいる姿。ただ、読んでいるだけの姿。そこに音はない。あたしは、夢の中へと引きずりこまれる。体中から無数の紐がのびていて、それを夢の中から引かれている。現へ一歩足を踏み入れた瞬間、夢へと戻っていく。それが幾度と無く繰り返えされる。まぶたが夢と現を微かに分けている。

頭が冴えなくて、体は動かない。眉間にはしわ。まぶたは頗る重たい。片目を閉じて、片目で見る。今度は反対の目で見る。やっぱり、海南はいないね。どこに行ったのかな。『疲れてそーなので帰ります。海南』そう紙が示していた。

「ばいばい、またね」

三

　モノクロっていうんだ。白と黒で見える人、もの、景色。もう慣れっこになった。だいたいのものには色がついているから特に不便でもないしね。モノクロにしか見えないのがあるんだよな。左目で見れば真実が見える。右目で見れば自由が見れる。年上なのに呼び捨てにされる。あはは、ずーっとそうだよな。気づいたらそうだよな。
　「こころ」
って、呼び捨て。右手を上げて答える。
　右目で見ればなんてことはない、自由が見えるから。自由とは何か、そう問われても知らないよ。この世界に自由はあるはずだから、自分で見つければいいんじゃないの。悲しみの歌は誰かより近い。モノクロの視界は相変わらず。
　「やっぱり見えないな」
天気雨のとき、そう呟く。人は自分の見たものでしかものを判断できないよな。

四

　セミの声しか聞こえないね。縁側に座って、スイカを食べてても、セミの声しか聞こえないね。バットにはスイカの三角に切ったのがのっている。結構きれいに切れたよね。父さんに
　「食べる？」
と訊いたけど、
　「いいわ」
断わられました。つれないね。折角切ったのに。どうしようかなぁ。まあ、あたしが全部食べればいいかな。セミの声しか聞こえないね。セミの声しか聞こえないよ。ふた切れ食べたところで、おなかがいっぱいになりました。バットにはまだ山盛りありますよ。仕方が無い、冷蔵庫にいれておこう。
　縁側に足だして、ぶらぶらしていたら、いい風が吹いてきた。おなかも膨れていい気分なので、少し横に。目を閉じれば、いろんなことが巡っていく。訳の分からない言葉が、巡っていくんだ。板は硬いけど、座布団枕に寝てみます。
　いつもどおりかな。夢ってね、色がついてるのかな、モノクロなのかな。どっちでしょうか。どっちでもないのかな。あはは、考えても分かんないや。
　ぐるぐると巡っていく。そして、少しずつ目が開いていく。寒いね、身震いひとつ。いつの間にか、タオルケットがかけてあった。
　「そとで、焼肉するから、こいよ」
とうさんがそういった。あたしはサンダルを履いて外にでる。だいぶ頭が痛い。とくに額の少し上が。
　空が赤く煌いている。蜩の声が世界に響き渡る。この世界は止まってしまったかのようで、あたしが動いているのがすごくこっけいに思えてくる。瞼は重たく、見える景色は傾いている。やさしい微笑みをひとつ浮かべる。とうさんの声が頭の中を行ったり来たり。「ご飯食べにいかなきゃ」そんなふうな言葉を添える。時間が引き延ばされて、あたしはどこかに置き去りにされている。蜩の声がひどく懐かしい。太陽はどんなだろうか。いつまで、この世界を照らすのだろうか。そんなこと分からない。
　とうさんがビールを飲みながら、肉を焼いている。キャベツを焼いている。たまねぎを焼いている。あたしは麦茶を飲みながら、それを眺めている。もう少ししてから、何か食べよう。
　蜩はどこにいるのだろうか。山を見上げても何も見えない。そこにあるのは木がたくさん。木がたくさん。たくさんの木のどこかにいるのだろう。あたしはそんなこと知らなくていいや。
　手の甲から出ている汗に唇を当てる。体にスイカが巡っているのか。スイカの赤い汁が巡っているのかなぁ。あたしは、なんとはなく汗がそんなふうな匂いを含んでいるような微かな欠片を見つけた気になった。あたしの汗の匂いなんて意識したことはなかったけど、欠片を偶然見つけた気になったから、引っかかる。口にしたものはあたしから出て行くんだという簡単な機構、その一端を僅かに垣間見た。心というよりは頭が静けさの優勢なところにある。ひどく澄んでいる。遠くまで、そう、街頭が消えていつもは見えなかった星に気付くようなそんなところである。空は透き通って全てが見えるよう。でも全部は見えてはないんだけどね。心はひどく落ち込んでいる。山と山に囲まれたこの地区のように低いんだ。すぐ側に山があって太陽の光は、他のそれよりも届く時間が短い。夕暮れはいまここにあるんだ。
　左右が非対称になるような笑みを浮かべていると、なんだかあたしが卑屈な感情の持ち主にな

れると信じてしまう。対称な笑顔は自然に笑ったときにしか浮かばないからね。いまは、非対称な笑みしかできないな。そんなことが少しおかしくて、左側で笑っている。唇が少しあがっていく。鼻から息が少しもれた。
　炭が赤々とした光を放ちながら、周囲を焼かんとしている。あたしは、その炭火に焦点を合わせるではなく、その炭火のあたりをぼやっと見ながら麦茶を飲んでいく。手の甲には少しの炭の放つ熱を、手のひらにはグラスの冷ややかさを、その双方をひとつにして口元へと運んでいく。
　炭の色が何かを求めている。その赤々と煌いている色が何かを求めている。それは何なのか。あたしは答えるべきなのだろうか。あたしの中を巡っている言葉の中から答えるべきなのだろうか。晴れ渡ってなにもないように見えた頭の中に、散らばっている見えないくらいに小さきもの、それが集まることにより見える大きさになる。意識というものがひとつ生まれていく。火に溶かされひとつになっていく。形を探りながら、落ち着くことのできるところをさがしている。ひとつの生き物のように、揺らめきながら、姿を探している。どれくらいのときがながれただろうか。一瞬だったのかもしれない。揺らめきは消え、ひとつの言葉が生まれ出た。「世界は何を求めているのだろうか」あたしのなかの見えていなかったものが、言葉になった。その不自然さ、あたしの中に異物が生まれる。こんな田舎で、家のなかにしかいない小娘が、世界のことなんて考えても何もならないと言葉がよぎるよ。いきなり否定かよ。馬鹿げている。あたしの中にある意識は世界を見ようとしている。だれか一人とも満足にコミュニケーションをとれないわたしが、そんなこと考えても何もならない。いや、それは違うな。あたしの心に浮かんだものは、あたしそのものだ。不自然さも否定もあたしそのもの、だから、これでいい。あたしは、世界がもとめることを知りたい。
　世界は何を求めているのだろうか。時代はどこへ行こうとしているのだろうか。世界史の教科書に出てくることはどれだけ世界を映しているのだろうか。疑問符の連なりが言葉となり溢れていく。あたしは、なぜに世界の求めるものを知りたいのだろうか。あたしは一体何がしたいというのか。ちっぽけなあたしが何をできるというのだろうか。あたしという言葉しか知らないようなあたしが何を思っても同じだろう。世界のことなんて結局、どこかにいる偉い人の思考の故なのだろう。目が捉えたのは、炭の表面が微かに灰となっていること。炭は燃え尽きると灰になる。人もいつか灰になって、土に帰るのだろう。どんな偉い人も同じではないか。どんな偉い人も同じではないか。生まれ、そして死んでいくんだ。あたしも同じ、生まれてきて、そして死んでいく。いつかね。いつか。世界も同じ、生まれたからには、いつか死んでいくんだ。世界のそれらはどんなのだろうか。世界はそのことを知っているのだろうか。世界とは何だ。世界とは。あたしがこんなこと考えていることが滑稽だ。偉い人でもないのにね。なんだろう、あはは、でも考えることは楽しいね。あはは、楽しいや。炭が音を立てて、弾けた。
　あたしは、コップに入った氷を舐めながら、コップを傾けたまま。空には闇の気配がする。空が闇を少しずつ含んでいくんだ。そしたら、夕焼けのきらめきが生まれているんだ。蜩が止まった。蜩の声が、止まった。ふと空には、ひとつ星が輝きだしている。炭の赤い揺らめきがよりはっきりと見えるようなる。せみが落ちていった。
　何か食べようと箸をもって、網の上をつついてみた。
　「まだ焼けてないぞ」
とうさんが、肉を指しながら言い放つ。
　「そーおぉ」

口を尖らせ首を傾けたあたしは、箸をひっこめて、箸の先を舐めてみた。子供みたい。あたしは、肉より野菜が食べたいな。少しは大人になったかな。かぼちゃとかたまねぎとかおいしいから。かぼちゃを手でつまんで、網の上に乗っける。かぼちゃは下茹でしてあるので、そんままでも食べれそうやけど、焼いてみる。ついでに、あんまり好きじゃないけどピーマンも乗せてみた。やっぱり子供みたい。だれか食べるやろ。放り投げる感じで、ホイって、ピーマンをもうひとつふたつ乗せる。

「そんなにのせても誰も食べへんぞ」

とうさんが、言い放つ。はいはい、そーですか。あたしが食べればいいんでしょ。てな感じ。ビールの缶を傾けて、はや三缶目、銀色に光る物体が並べてある。とうさんは、お酒すきやな。お酒飲まない日はないんとちゃうかな。ご飯食べながらいつも飲んでるよな。缶が空になった気配がしたので、あたしは缶ビールをとりにいく、四本目ですね。

ピーマンを裏返したら、真ん中あたりが黒くこげている。なんとか食べれそうかな。かぼちゃも黒い斑点ができてます。うーん、いまいちだ。肉をとって、見る。うん焼けているね。たれを付けて口に運ぶ。運ぶ。三つぐらい運ぶ。おいしいです。とうさんに微笑みかける。おいしいです。とうさんは、鼻で笑っている。たぶん、馬鹿にされた。それでも、あたしは微笑みながら、口に運んでいく。

「おいちぃ」

とおっても小さなこえ、ありのくしゃみくらい小さな声で、そう言った。早く、かぼちゃ食べたいな。コップを傾けると、小さな流れが底からどうにかこうにか乾いたところを湿らせてかき分けて、あたしの口へと。あと少し、あと一秒、がんばれって少し傾きを急にする。がんばって流れて来いって。でもでも、ツルって滑って氷が飛び込んでくる。上手くいかないね。コップに麦茶を足して、いっきに飲み干す。氷は麦茶を入れたらすぐにシュワシュワって溶けちゃった。かぼちゃを食べている。なんでぇ、とうさん。ひらいた口がとじないよ。あーぁ。食べちゃった。

「あたしのかぼちゃ・・・」

「名前書いてなかったで」

そんな屁理屈いりませんよ。ほんといりません。しゃーない、今度は三つ焼いてやりますよ。酔っ払いに食べられても二つ残りますから。

光がどんどん減っていく。暗闇があたしを覆っていくんだ。空には星。星はいつも空にある。空にあるのにあたしには見えない。太陽の光ゆえに見えないんだ。闇は小さな輝きをあたしに見せてくれる。光は特異な存在に過ぎない。日が沈む西の空もいいけれど、あたしは東の空を見上げている。空は青く黒く、星を含まんとしている。

手元は暗い、僅かに炭の火があるが、そんなのでは到底、とうさんの顔すらはっきりしない。でも、炭の光はやさしい。蛍光灯の光よりもやさしい。肉が焼けているのかどうかわかんないね。適当に感で食べるしかないね。適当適当、食べれればいいや。おにぎりを作って焼いてみる。たれを付けて焼いている。たれが、炭の上に落ちて太陽の黒点みたい。黒々黒々。とうさんは銀色に光る物体を五個を残して撤収。

「あと頼むわ」

然様ですか。そうですか。

ひとつ炭を足す。もうひとつ炭を足す。もうひとつ。真っ黒な炭が火の上に乗っている。すぐに、真っ黒な炭も炎を纏う。ほんの僅かの間だけ炎を纏う。そして、灰になっていく。空に輝く星も同じ、いつかは光を失うんだ。炎はいつかなくなってしまうんだ。

この世界は輝いているのだろうか。この世界は炎を纏っているのだろうか。もう灰になっているんじゃないのか。それとも、まだ、燃えてすらいないのかな。そんなこと分からない。分からないけど、考えてみる。うーん、偉い人じゃないからやっぱり分かんないや。
銀色の物体をひとつ投げてみる。ふたつ投げてみる。みっつ投げてみる。よっつなげようとつかんだが、少し重さを感じた。
「まだ、残ってるやん」
ドボドボ、と泡が出てくる。炎の上に落とす。霧状のものが浮き上がってくる。あたしの方に向かってきた。あたしは銀色の物体を口に付ける。ゴクッと液体を、ひと飲み。小さなとげとげのつばを飲み込むような感覚がのどに至る。大きく息を吐き出して、空を見上げた。空の星は、夜を輝かせている。
お皿や、何やらを持って家に入ると、とうさんが寝ていた。少し蹴飛ばす。ぜんぜん反応がない。いびきをかいて、ぐっすりです。何度かとうさんの側を通りながら、ものを運んだ。大の字で寝ています。寝ています。寝ています。起きません。片付けを終えても、起きません。寝てますね。おやすみなさい。
赤いサンダルを履いて、夜の世界を眺めに出かける。出かけるって言っても、目に見えるところに行くだけやけどね。夜の風が吹いている。こころの家には明かりがついている。あたしの家は真っ暗だ。あはは。当たり前のことだけど、空には星が瞬いている。一面に張り付いている。山と山で、空は狭いけど、星の数は、どれだけかな。アスファルトの上に寝そべる。大の字になって空と対話する。世界のほとんどはあの空なんだ。小さな声で、つぶやいてみる。
「世界の果てにあたしがいる」
その声があの星の彼方のあたしに届けばいいのに。あの星の無限の彼方にいるはずのあたしにとどけばいいのに。あたしは、空と同じになる。目で見る世界はあたしの目の前にある。空の中にあたしはいるんだ。ただそんな気になっただけ。昨日よりも今日、今日よりも明日の方が世界は輝きを失うのだろうか。炭火のように、いつか灰になってしまうのだろうか。見える世界はそうなるとは思えない。しかし、そんな直感当てにならないねぇ。
「世界の果てにあたしがいるんだよぇ」
なんだ、「よぇ」って。星に願いを、あたしに会いたいです。そういうところのことを尋ねる。
「世界は何を求めているんですか。あなたは何を求めているんですか」
唇が動くだけ。声になっただろうか。それは分からない。あたしには聞き取れなかったから。
「戯言だ、戯言」
今度は、はっきりと聞こえる。あたしの声が聞こえる。
「世界の果てにあたしがいて、いつかいつかとあたしのことを待っているんだ」
呟きが、呟きを越えて、声になる。飛んでけ、世界の果てまで飛んでけ。そしたら、そしたら、あたしに言ってよね。「まだ待っててね」って。
外灯の光を避けるように歩いていく。星の光が見えなくなるから。星は、僅かな電気の光でも見えなくなる。星の光は弱弱しい。それだけ遠くから来ているってことか。左目だけで、星をみる。ずーっと昔に起きた、宇宙の始まりを思う。宇宙があたしよりも小さかったなんて信じられないけど、そういうことはいまの世界で常識みたいだ。どれくらい昔のことだろう。億年の単位の昔のこと。この世界は始まったんだ。そう何かで読んだ気がする。何億年だったかな。思い出せないや。たぶん百億年よりは昔のことだな。忘れてないよな。この世界は、始まりのことを。そうでないと、人が宇宙の年齢を分かるわけないからな。世界は何を求めているんだろう。

はて、何を求めているんだろう。深呼吸。深呼吸。人の思考など、微々たるものだ。でも、あたしは知りたいんだ。そして世界の果てにいるあたしに会うんだ。外灯の光が目に入らないよう、光の影を歩いていく。失うものの方が得るものよりも多い。そんな言葉を知る。望みすぎているあたし。でも、何も望まなくても同じ。赤いサンダルが音をたてている。星の光は音を吸い込んでいく。

世界の果てがあの星星の先の闇の中にあるんだ。あたしの目には写らない世界。そんなところがある。見ているのはごく僅かの光とごく僅かの闇。ほとんどは、あたしの目にすら写らない。あたしの見えないものばかり。アスファルトの道をたどると、川に行き着く。でも道を外れない。夜の川は怖いから。水が闇を吸い込んでいるから。僅かな闇を吸い込んでいるから。世界は闇。その闇に食われるか食われないか、それはあたし次第。ふらふらと歩く。横にふらふら、足首を痛めないように気をつけつつも。ふらふら。世界とあたしは繋がらない。世界の言葉をあたしは知らない。あたしは言葉を見ても、使わないからすぐに忘れてしまう。使わない言葉はすぐに忘れてしまう。学校で習った勉強なんてすべて同じ、どれも単なる言葉。使わなければすぐに忘れてしまう。国語も算数も英語も全部違う類の言葉。世界には言葉が溢れている。知らないのはあたしだけ。

ふらふら、ふらふら。歩いていく、酔っ払いの真似事です。夜の道をふらふらと。農道ですから、車なんて通りませんよ。ふらふらしても、道の上で寝てても大丈夫です。家の明かりがいつの間にかついていた。かあさんたちが帰ってきたんだろう。とうさんがこんなに早く起きるわけないし。きっとそうだ。そういうことだろう。憶測。家からも見えない影に入っていく。ここならもっと星が良く見えるに違いない。電気の光が邪魔しないからね。暗闇の中寝そべってみる。アスファルトがひんやりと心地よい。地面が頭に当たるから、手で枕をして防ぐ。やっぱり手が痛い。でもいいや。口をあけながら空と一体化。星が手で掴めそう。ゆっくりと目を閉じる。世界の声に耳を澄ます。世界の呼吸を感じ取る。

思考がおちていく。どこかにおちていく。安定なところへ、より低いところへ、おちていく。なぜに世界は広がっているのだろうか。広がった方が安定だから・・・か。お・や・・す・・・み・・・・な・・・・・さ・・・・・・い。

あたしは眠ったほうが安定だから、眠ります。

五

　モノクロの世界は、美しい。テレビをつければ色、色、色。そこにあって、モノクロの映像が美しい。美しさは、古き良きことを思わせる。日本は心をなくしてはいない。ただ、知らないだけだと思う。あふれすぎたモノが心を見失う原因。そんなに単純ではないけれど、光が見えないのは確か。モノで遮られてしまって、そこにあるはずの答えが見えない。モノクロは美しい。それは、こころの右目に宿るはず。

　「きみは美しいよ」

　ものは言い様ですよね。感覚がものを言いますね。ただ、心揺すられ、涙する、それが美しいとは言えませんか。モノクロは美しい。それが季節を映さなくても、左目には季節があるから。季節は巡る、心の中を巡る。また、舞い戻ったと思える瞬間が、嬉しさを醸し出す。日本にあって、それを知らないのは、心が無いということではないか。言葉を知らなくていい。ただ、季節を映す鏡であって欲しい。そう願う。凛という言葉、だれかに託したい。華という言葉、きみにあげよう。ただ、まだ見えないんだ。

　見えないことは見えないと言えることが言葉。右目で見た世界は美しい。儚い夢を抱きながら、何もない風にふるまう。語られる言葉は何もない。ここは日本です。

　君が笑うのが嬉しい。恥ずかしそうに、下を向きながら、照れ笑いをするんだ。

　「笑った顔が可愛いね」

　「そんなこと言っても何もでないですよ」

そう答える君がいとおしい。いつまで、君を見ていられるだろうか。ここにある言葉は残り少なくなってきたからね。左目でみる君は、どこかぼやけている。右目でみると美しいのにね。

六

『あたしの声が消えないように、ここに書いておこう。ここっていうのは黒い本のこと。黒い本は記憶の欠片なの。そうだ記憶の欠片なんだ。どこまでも続くこの星の記憶とともにいつまでか存在し続ける欠片なんだ。あたしが書く言葉は、あたしの見たもの。そしてその記憶。

世界にはいつから色があったのだろうか。はじめからとりどりの色があったのだろうか。それとも無くて、モノクロだったのだろうか。あたしはその色を確かめることはできないの。だって、いましかあたしは存在していないから。世界の始まりの時にはあたしは存在してないから。でも、世界の記憶の欠片はどこかにある。あたしはその記憶をさがして、それを書いているんだ。それがあたしになるように。

小さな球が膨らんでいく世界。風船が膨らむように、どんどんどんどん膨らんでいく。あたしの知らない遠くのところまで膨らんでいく。そしたら、あたしの見えない世界ができるんだ。あたしの記憶が届かない世界がそこにできるんだ。膨らみ続ける世界にあたしはいるんだ。黒い本には書くことのできないことがある。あたしが見ることのできないこと。それがそこにはあるんだ。だけど、こころなら飛んでいける。こころだけでしか見れない世界がある。

どうだろう、あたしは何処まで見ることができるのだろうか。膨らんでいく世界を何処まで見ることができるのだろうか。欠片が消えた。そして、それを拾い集める。小さくなった、塊をひとつ拾い見つめるんだ。そうして、何かを探している。何を探しているのだろうか。何をあたしは見たいのだろうか。あたしには分からない。でも、それでもあたしは知っているんだ。後から見ればわかるんだ。あたしはこれが見たかったのかということは。でも、いまは分からない。いまは言葉にはならない。でも、それを見るために確かにあたしは世界を巡っている。確実に動いている。すごく感覚的だけど、あたしは分かっている。でも、分からないんだ。難しいね。どういうのだろうか、そう。

朝家を出るときに何故か傘が必要な気がする。なぜだか知らないけどね。天気予報を見たわけでもない、しかも外は晴れている。少し迷って傘をもっていく。そんなときがある。そしたら、そういうときに、傘が思いもよらないところで活躍するんだよ。そう、思いもよらないところで、はじめから分かってたかのように傘が活躍するんだ。そんな感じなんだけどね。やっぱ難しいかな。

消えてしまわないように、あたしの言葉が消えてしまわないように、記憶の中を探っていくんだ。探し回って見つかるものもあれば、なんとなくどこにあるか分かっているものもある。外形が違えば、中身が同じでも気付かないこともある。あたしはどんな形をしているのだろうか。そんなことは分からない。世界が何を求めているのかが分からないのとおなじ。人のことは分からない。そう、外形が違うから。でも一概にそうは言えないかも、分からないのは当然であって、分かろうとすることがそもそもの間違いなのかもしれない。あたしは綺麗になりたいよ。そしたら、そしたら、もう少し頑張れるから。世界に響く言葉をもって、どこかに飛び出していくんだ。いまはまだ、何も見えていないけど、見えていない今だから、あたしは考えるんだよ。だれかと違うことを考えるんだよ。そこに世界への言葉がある。そこに、時代への提案がある。そういうことを考えるんだ。世界は分類されている。でもその分類はただの分類に過ぎない。ホールケーキを八つに切り分けたのとはわけが違う。ホールケーキを見て、いろいろと外から分類しただけなのだ。だから、食べるときに、分類した結果にしたがって食べるということはしないはずだ。だって、それはひとつの見方に過ぎないから。でも、いろんなところで、分類された結果

、切り分けられてしまう思考がある。そして、非難して、いがみあって、争うんだ。ばかげていると知りながら、相容れない感情に支配されてしまう。分類はただのひとつの見方に過ぎないということを知らない人がたくさん、たくさん。いろんな見方があるというのを知ればいいのですけれど、そーもいかないのが人かな。結局何をいいたいのだろうか。

世界の風潮に流されることなく。世界の姿をしり、そして次の時代への変化を。そういうことを考えることが、何を意味するのだろうか。言葉の上ではなんでも言える。嘘や張ったりを繰り返して、詐欺だのペテンだのと散々言われても、なんだっていえるんだ。屁理屈をうだうだと考えることはできるんだ。あたしにできることはただそういう類のことだけなのかな。考えるということはそういう結果しか生まないのではないか。ほんとうの姿は、どこにあるのだろうか。世界にあたしだけがいるのではない。だからこそ、知りたいことがあるのに。なににも上手くいかないと思いこんでしまう節があったり無かったり。世界の人口比例して、人の思考も短絡的になってはないか。刹那の感情でしか物事を見れていないのではないか。ゆっくりと、しっかりと物事を見据えていくことが欠けてはいまいか。石油のことにしてもそうだ。そうだ。環境問題もそうだ。南極大陸の氷が溶けたら、この星の環境はあたしたちにとって不利になるにしろ、有利にはならないだろう。きわどいうところであたしたちは生きているということを知らねばならない。人に比べて、地球が大きいから、この星は無限の大きさのような気がするが、それは間違いであって。どんなに大きな建物も最上階があるように、地球にも大きさの限界があるんだよ。無限ではないのだよ。ただ、あたしたちに比べて、大きすぎるってだけなんだ。知らなければよかったと後悔しても遅いよな。知ってしまったからには、世界に触れないとね。それが考えるということだろう。言葉が少ないけど、何も無いわけではない。そこにある言葉を何とか駆使して、考えるんだ。あたしが見た物事を考えるんだ。考えることこそ、あたしが生きるということ。そう生きる手段なのね。目的でもなく、結果でもなく、ただの手段なの。いまの世の中、何が大切なのか、何があたしたちを支えているのか分からなくなるけど、おちついて考えれば分かるはず。だってここにあたしがいるんだから。人によって違うけれど、風潮に流されずに生きていたい。願う心はここにある。だれかが言った言葉を糧に、ひとつひとつ歩んでいきます。人は再生し、そして繰り返しのような毎日を生きていく。でも、良く見れば分かるでしょう。違うってことが。意識していないだけで、どこかでは感じているんだよ。ただ、それに気付いていないだけなのね。そう見えていないんだよ。記憶の片隅に、誰かと共にあるゆえに、気付けないものがある。どこかで見たことだけに目がいって、ほかのことが見えなくなっている。そんな作用がもどかしい。太陽が出ているときは、星が見えないように、見えなくなってしまう。でも、太陽があるからこそ、あたしたちは生きている。陳腐な比喩が苛立たしい。

見えない世界をどうすれば見えるのだろうか。見るのではなく感じろ、考えるのではなく感じろ、感じるんだ。走って、速さを知るように。世界を駆け抜けて感じるんだ。でもどうやって駆けるのだろうか。そんなの分かるわけない。人に褒められても、じぶんがそれで満足していたら、どうにもならないの。あたしがどうしたいのか、それを求めるしかないね。そう、世界の果てにいるあたしなら、わかるのだろう。

何処までも続けるように、書いていく。書いていく。その先に見えるものが見えるまで。分からないからこそ、捜し求めるんだ。頭の中を巡っていく言葉が、消えないように。消えないように。消えないように。いっそ消えてしまおうか。いっそ、そのほうが楽なのかも。声が声が、聞こえますか。聞こえていても、返事はしないで。

分かるか、分からないか、それが気がかりなところ。でも、ね。それが本当の言葉。分かるかいな。飛んでけ、飛んでけ。言葉を越えて、時代も越えて、世界も越えて、どこかわけの分からないところまで飛んでけ。

くだらない、品の無い。教養も無い。何も見えないようなことばかり。それがどれだけ、あたしを支配しているだろうか。あたしに必要だからそこにある。形容詞もただの分類に過ぎないということか。時代を錯誤してしまう。いまだからこそ思うこともある。いつかだったら、思いもしなかったことをあたしは思っているんだ。ただそれは目の前にあることしか気にならないということに他ならない。消えないで、消えないで。虹よ。虹よ。そこにあることをあたしに教えてよ。言葉ではなく、体に直接に教えてよ。記憶のなかで生きるのは、記憶のなかで生きること。記憶のなかで目にすることは、その枠を越えて沸き起こる感情の起伏。研ぎ澄まされていく記憶。無理解と無反応。言葉が分からないからだれにも伝わらないんだ。それが悲しくはないな。どこまでも再生されていくことを願っているが、それが本来の姿ではないから。同じことを何度でも繰り返すよ。同じことを何度でも繰り返すよ。世界の果てにあたしがいて、いつかいつかとあたしのことを待っているんだ。そういうことだろう。そういうことがあたしの生きる糧としてあるのだろう。だれもわからない。だれも共有できない。ただの感情。ただの一体感。それはどこからうまれるのだろうか。聞こえないよ、誰の声も。そう、あたしの声すら聞こえないよ。そこにたどりつきたいけれど、だれも昨日を振り返らない。昨日のことが背中を押してくれるのに。考えること。考えるひと。考える。そして、何かを思うのだ。あたしはここにいるのだと、知るのだ。言葉ではなく、体が感じるのだ。内から湧き出てくる感情に体が応えるのだ。涙がでれば、それが応えになるのだろうか。聞こえることは、その果てにある声。きっとどこかにあるはずの言葉。見えないけれど、ここを越えていく。同じことを何回も書いて、そして知るはずの壁をみる。だれかが、教えてくれることなど、どこにもない。書いてある言葉も、声にだされた言葉も、あたしを刺激するが、あたしに教えてくれるものはない。あたしがただ考えることをはじめるきっかけとなるばかりだ。だれも、聞こえない声を聞く。見えない言葉を見る。それが、できるかできないか。それこそが、喜びへと繋がりはしないだろうか。空しくて、空しくて、どこかにあるはずの声を探している。そんな空ばかり見上げても、見えるものは見えないよ。空をみるなら、限りなく遠い空までみないとね。聞こえるだろう、見えるだろう、星の声が。何色だろうか。何色に見えるのだろうか。その輝きは光だろうか。

誰の声が聞きたいのだろうか。書いた人の顔が見えないことは日常茶飯事、それでもその人は存在しているわけで、それがなんだか実感としてないんだね。あたしが書いたことでも、あたしが書いたという実感がなかなかわかないことがあるからねぇ。数学の答案を書いているときは、頭の中でただ問題を解いているよりも多少は実感があるけれど、一旦文字にしてしまえば、それがあたしから離れてしまったみたいで、あたしの内にあるものでないというふうな感覚になるんだね。人の書いたものをみてもなんだかねぇ。人が書いたものだという実感みたいなのはなかなかわかないよな。足し算の問題で、１＋７＝９とか書いているほうが、ぽっぽど人が書いたもののような気がする。なんだか実感できるんだ。何にあたしは慣れてしまったのだろうか。何かに慣らされているんだろう。わけの分からない思考こそがあたしを刺激していくんだろう。そんな、訳の分からない理屈を並べてみる。あたしの頭の中は分からない。何が詰まっているのだろう。何も詰まっていないのかな。人は頭でものを考えるとか言うけれど、それはただの主なるところで、あたしは考えることだけしかしないということはなく、息をしたりしてリズムをとっているから、つまりからだの全てを使ってものを考えているのだろう。精神は体に宿っているんだ。

つまるところあたしのからだのすべてがひとつの思考媒体である。記憶を巡っても、そんなところ、だから全体のバランスを大切にしないとね。特異なところはあるべきですが、それでもバランスが大事です。ものごとが続くようにね。

続くこと、続けることがいつの間にか難しい世の中になったのかも知れません。どこかで、だれかがすぐに非難をします。完璧という幻を映して、それとは違うと指をさすのです。それのどこが悪いのか分かりません。でも、なんだか息苦しくはありませんか。苦しい人たちがもっと苦しくなるのです。それでいて、社会ってものは良くなるのでしょうか。悪いことをすることはいけないことだと思っているのでしょうか。悪いっていうのは何か漠然とした感覚です。だれかが傷つくことが悪いことなのだと、はっきりと言えないことが悪いのです。ルールは守るために存在するのではありませんよ。ルールはただ、だれかの心の安心の為にあるのです。何も考えずに遵守することがそんなに偉いことではなくて、生まれつきの性分によるのではないのですか。そもそも偉いという表現が悪かったですね。でも、ルールはただのルールですから。それ以上でも、以下でもありません。絶対の存在ではないですね。

世界は何を求めているのか。それを探しても見つからない。見つかるのは、何を求めていたかという過去のこと。過去の残骸がぼろぼろと出てくるだけなの。どうしても見つからないのだ。ちがうのかな、何が違っているのだろうか。言葉で考えても無駄なことなのかな。言葉の限界なんてどこにもないはずなのに。見えないのは当たり前のことかな。どこか忘れられないことがあるのだろう。聞こえるのは明日のこえ。

生きたいのだ。あたしは、死ぬまで生きたいのだ。ただ、それだけのこと。ただそれだけのことだろう。そう世界も生きたいのだろう。いつか来るはずの滅亡まで生きたいのだろう。それが世界の見たいこたえなのではないでしょうか。ないでしょうか。ねぇ。』

「ねぇ、聞いてる？寝てちゃだめだよ」

七

　家の裏に山からの水を引いている水をためる石でできた器がある。大きさはどれくらいだろうか、ちょうど小さなお風呂の浴槽くらい。そこに山からの水が絶え間なく流れ込み、流れこんだ分だけ器は吐き出している。冷たくやさしい。その器の中にスイカを浮かべて冷やす。そんな冷蔵庫みたいに冷たくはならないけど、それこそいい感じに冷えています。スイカがぷかぷか浮かんでいる姿。
　あたしは、角ばった小石を拾ってスイカにむかってなげる。距離十メートル。カツン、石の器の側面に当たる。鋭い角度で地面に落ちていく。右目で見ながら投げてみる。全然違う方向に飛んで行く。距離的も全く届いていませんね。右腕の振りもおかしかった。やっぱり、目が大切かな。左目で投げてみる。少し力をいれて、とりあえずは届くように。投げるというよりは押し出す感じ。
　「ほい」
掛け声も少し。小石は放物線を描きながら、って。左目だけじゃどうか分らんのだけれども。経験上、放物線を描いているとの予想。器を飛び越して、器の向こうの石垣にあたりました。コツン。跳ね返った小石が、器の中に飛び込みます。氷山の様に頭だけだしたスイカにポン。当たり。意外な幕引き。小石は器の中に沈んでいきます。すーってね。
　両目で投げてみる。ポチャンって落ちました。もちろん器の中の水にね。たった三個しか投げなかったけど、思いもよらず二回目で当たってしまったので、満足です。
　右目で、見た世界はフリー。悲しみなんて、思い方。凛とした世界を見ればいいんだ。スイカに、傷がついてしまった。ああ、また怒られてしまいます。でもこんくらいやったら分からんかもね。
　スイカはくるくると回転しながら器の中を行ったり来たり、壁に軽くぶつかり跳ね返っている。表面はヌメヌメしていて、なんか魚みたい。こんな緑の魚嫌やけどな。軽く上から押して、水の中に沈めてみる。滑ってうまく押せない。くるくる回転している。くるくる。水の流れに押されてくるくるくる。良く回っているねぇ。
　「スイカの名産地は素敵なところよ・・・。」
少し歌ってみた。小学生のときキャンプで歌った。キャンプファイヤーを囲んで歌った歌。闇の中を照らす炎。顔が熱くなった。
　「遠き山に日は落ちて、星は空をちりばめぬ、今日の業をなし終えて、心かろく安らえば、風は涼しこの夕べ、いざや楽しきまどいせん、まどいせん」
歌詞ってこれであってたかな。小学生のときは聞いて覚えてたから、自信ないね。まあ、ええか。目を閉じれば、夕暮れが・・・。でもまだ真昼ですね。
　空を眺めていると、心が揺れ動いているのが分かる。青い空はあたしをいつも見ていてくれたから。左目で見ても、右目で見ても、同じ。心が揺れていく。悲しくなったり、嬉しくなったり、元気が沸いてきたり、どーでもよくなったり。いろんな心を空は教えてくれる。空にある太陽は光が強すぎて、どうにも見えない。心が見えなくなってしまう。
　スイカの隣から、水をすくって顔にあてる。もう一度水を顔にかける。もう一度水で顔を洗う。首に巻いていたタオルで拭く。まだまだ、暑いな。赤いサンダルが少し脱げそう。
　スイカを切っても、スイカはスイカ。それがすごくいとおしい。
　少し昼寝をする。

そして、夕方散歩に出かける。
なるべく人に会いませんように。でもでも、そんなにうまくはいきません。道に出たとたん、隣のおばちゃんがいました。突然目があったので、少し会釈が出来た。「こんにちは」って言葉を添えて。赤いサンダルの音を聞いてみる。かつかつ言ってますよ。やれば出来るやん、てね。考えないと出来るんやけどな。瞬間の反射ですよ、反射。考えると駄目やね。
川まで、少し歩く。川までは、どれくらいかな、アスファルトの上を二分位かな。直ぐ着きますよ。だってうちの縁側からでも見えるんですもの。
小さなときは一人で川に行ってはいけません。などと学校で言われていた。大人の人と一緒に行きましょうとな。あたしは大人なのだろうか。どうなのだろう。一人で行ってよろしいでしょうか。
川は道より一段低いところにある。川までは、土手をおりていく。ヨモギやササやよう分からん草があたしの視界を遮っていく。幅わずかな道を下りていく。へびさんがでてきたらどうしようかな。困りますね。いつものように心配になる。目に草が入りそうになり、目を閉じる。でも歩みは止めない。なんとなく下りていく。河原は狭い、あたしが三歩しか進めない。
水の流れの中に、大きさがあたしが丸まったくらいの石が、あたまを出している。あたしはその石までジャンプ。ホイ、ホイ、ホイ。石に座って、足だけ水に浸す。そんなに冷たくはない。少し冷たいけど。水の流れが伝わってくる。あたしの体の中にも流れているものがあることに気付く。あたしが確かに依存している気がする。生きている実感があるっていうのかな。そんな感じ。太陽は、西の空でオレンジ色になっている。山が近い。雲の切れ間から、こぼれてくる光。足元には水面が流れていく。少し足で水を跳ねる。右、左ってね。リズムよく、バランスよく。右目で見る景色と、左目でみる景色は全く違う。そう、交互にリズムよく、バランスよく。光が目を捉える。世界は光に溢れている。知らないことは知らないよ。そんな当たり前のこと。それが、右目の主張。
目を閉じても川には落ちない。川に落ちたら濡れてしまう。いっそ川に落ちてしまおうか。そしたら、何か見えるかもしれんし。でも、そんなことすら出来ないんですよね。あたしは。世界の果てにあたしがいても、そこに飛び込めるか。そんなこと関係ないかな。世界の果てなんて、どこにあるのか分かんないし。足だけ突っ込めるわけもないし。あたしの左目も見えてないんですよ。
「あはは、なんでこんなこと考えるんだろう、意味無いのにね」
少し大きめの声で言ってみる。だれも聞いてないから大丈夫、大丈夫。水の音が、消してくれるよ、あたしの声なんて。あの道路にすら届かないね。数メートル先の道路に目をやる。やっぱり誰もいない。それが、少し当たり前すぎた。
「ただいまぁ」
出来るだけ大きな声で叫んでみる。
「お帰りー」
続けて叫んでみる。だれにも聞こえてないから、あたしはこんなことが出来るのだ。もう一人あたしがいて、いまのあたしのことを見たら、なんていうだろう。「あほか」かな。人目を気にしない人に憧れる。いや違ったかな。人に嫌われることを恐れない人がうらやましい。そう、自分勝手で、気の強い人には勝てない気がする。あんな風に生きられたらいいなぁ。でも、あたしの中にあるあたしは、そうはいかない。あたしの事ばかり、あたしのことばかりで、憧れにはほど

遠い。やっぱりだれにも嫌われたくない。だから、ひとりでいるのが心地いい。だれにも嫌われないから。川は言葉を発しない、好き嫌いを言わない。ただあたしが感じるだけ。空もあんなに赤くても何も、何も言わない。あたしは嫌われるのが嫌だ。たとえ刹那の感情であっても。でもね。だれかが、あたしみたいなことを言ってたら、「それは無理だね」っていうかも。

川の流れがあたしの足の一部になる。あたしの足が徐々に川の温度に近づいていく。あたしの体が、川の温度に近づいていく。ちょっとだけ変わったんだけどね。ほんのちょっとだけ。

帰ってごはんでも食べようかな。

ご飯をたべたら、日が沈んでいた。外が気になる。空と話がしたくなった。外に出て、アスファルトの上に仰向けになった。星が輝いている。いまさらながら、天の川にはため息がでる。人はなぜ、地面に張り付いていなければならないのだろう。それはだれが決めたのだろう。地球という星の上でしか生きられない定めなのだ。定めには逆らえない。

ヒューン、ヒューンってロケット花火が飛んでいった。どこかの家で、花火をしているのだろう。音のするほうへ寝返る、ロケット花火の軌跡が真横から眺められた。なだらかな曲線を描いて落ちていく。あの花火も地球でしか存在できない。かなしいかな、うれしいかな。あたしたちはこの大きな塊に捕らえられている。記憶の彼方にある太陽。太陽がこの塊を捕らえている。きっと太陽ももっと大きなものに捕らえられているんだ。きっと、そうだ。ロケット花火は、どんどん飛んでいく。ヒュー、ヒューって響かせ、連続で飛んでいく。あたしは、世界に捕らえられている。でもね、捕らえられているということは、捕らえているということでもある。世界は、あたしに捕らえられているんだ。星を見るということは、星に見られているということ。

あたしは、空へと向き直った。少し風が吹いている。雲が星を隠していくんだ。雲の大きさだけ、星は隠れてしまう。狭い空がもっと狭くなってしまう。空に手を伸ばして、星をつかもうとした。握ろうと指を少し曲げたその、何かを求めんとする始まりの瞬間で手の動きを止める。このまま握ればクウを掴むことになる。あたしは空に見える星をつかめないのは知っている。でも、星を掴もうとした。なぜに、そんな動きを求めたのだろうか。動きを止めた手は、あたしに何かを言わんとしているのではないのだろうか。確かに、手には力がみなぎっている、しかしながらその力はすぐにでも散逸してしまう類の力で、その手に永遠に留めておくことはできない。暗がりのなか、僅かに見えるその手に少しでも長く力を留めることができるのならば、あたしはこの暗がりから抜け出せるであろうか。手を握ればそれでおわるその力。クウを掴んだときに体を伝い散逸される力。空の星さえつかめれば、その手に力を留めることができるのに。今も空しく、それはかなわないの。

腕を下ろし、地に手のひらを。小さな石をその手に感じる。石を上に投げてみた。夜の闇が石を吸い込んでいく。何処にいったのだろうか。そんなの落ちてくるまで分からない。しばらくして、あたしの胸に力がかかった。あたしの投げた力が帰ってきた。

八

　モノクロの世界は相変わらずモノクロがいる、モノクロでも美しいものは美しく見える。もうモノクロに慣れてしまったからこれが普通なんだと思える。見るものにメリハリがついていいかもしれない。でも、空をみたらすこしがっかりするんだ。空は見えるけど、そこにあって欲しいものは見えないから。

九

「ランチに行きたいな」
呟いても、だれも聞いてくれないね。あたしの呟きは誰もいないところでこそなされるの。それがいいことか、悪いことか、分りません。どっちでも関係ないか。
「ランチに行きたいぞ」
少し、力を込めて言ってみる。怒った調子になってしまい、ひとりで笑いそうになった。空に見えるのは、この縁側からの風景。
聞こえるのは、見えるのは、感じるのは世界からの調子。どこまであたしの世界だと思えるかは分りませんが、この声は聞こえます。そこに見えるのは明日の言葉。その果てに見えるのはそこにある世界。気軽に書けばいいんだよってあたしが言うの。だれにって、あたしに。黒い本に書いていることは、思いつくまま、一秒先に何を書くかも分らないようなことばかり、書いているうちにどこかに行ける。それが少し楽しくもあり、いつも同じところを巡ってしまう辛さもある。ありがとうって書いても、あたしが読まないと分らない。黒い本に書いてあることはあたししか分らないことばかり。世界といえば、黒い本の中もあたしの世界、いや、あたしだけの世界なのかもしれない。あたしはどこまで世界を感じることが出来るであろうか。広く広く、世界の果てまで感じたい。そう願う。始まりから終わりまで感じたい。心が世界の隅々まで届くように、世界の隅々まで感じれるように、どうにかこうにか研ぎ澄ましていく。
「でも、ランチに行きたいな」
口から出る言葉は、そういうこと。足をぶらぶらさせながら、考えたこと。それが、よくもあり悪くもある。願うのは、その言葉の行方。どこに行ってしまうのか分らないことが嬉しいこと。あたしの想像のしていないところ、心でしか分かってなかったところにいくと嬉しい。飛んでけ。
「やっぱり、ランチに行きたいな」
そういうことだ。そういうことだ、口と頭は繋がっていない。でも、離れてもいない。口からでるのは、あとで考えるべき言葉だ。
田んぼの畦の草刈りをしている。たぶんあれはとうさんだろう。水筒にお茶でも入れて持っていってあげようかな。でも、いらんって言われるかもね。草刈り機のエンジンの音が山の間に響いていく。大きくなったり、たまに小さくなったり。これが今なのだね。空はいつものように青い。いつも同じに見えるから不思議。あたしの赤いサンダルもいつも同じに見えるから不思議。あたしもいつも同じに見えるから不思議。子供のように聞いてみる。
「何で、みんな変わらないのですか」
そんな答えのない、問いをしたら、困りますね。あたしも困るし、聞かれた方も困ります。難しいからではなくて、考えたくないから。だって、そういうことは、考えない方が生きやすいからね。考え出すと、同じところをぐるぐる回ることになるからね。何も手につかなくなるし。本当はどんな問いもこの類の性質を持っているはずだけど、それが分らないように答えらしきものがあるんだね。何でって言われて、理由なんかないって答えるのが一番正しい気がするの。「なんで空が青いのですか」この問いに、答えらしきものはありますが、その返答が本当に答えになっているかはだれにも分りません。科学は怪しいところをいつも含んでいますから。あやしさの多い少ないはありますけど。それに、理由とは、ただの心の平穏の為で、答えを知ることが理由の存在する価値ではありませんから。って、また変なこと巡らせてますね。だんだん、空がむな

しさを増していく。
「ランチに連れてって」

うだうだ考えているうちに、とうさんが帰ってきた。
「お茶くれ」
そうあたしに言う。グラスにいっぱいお茶をいれて渡す。さっきまであたしが座っていたところにとうさんは腰かけている。草のにおいがする、昔のおじいちゃんと同じにおいがする。
「どうぞ」
とうさんは、勢いよく飲み干した。空のグラスをわたされ、
「もう一杯くれ」
とな。あたしは、グラスをとうさんに渡し、茶瓶をとりに。これで、なんぼでも飲めますよ。とうさんの隣でついであげた。またすぐに、なくなった。
「もおええぞ」
グラスを置いてとうさんはどこかへいった。あたしはグラスにお茶を少しだけ入れて飲んだ。
縁側にはまたあたしだけ。元に戻ったって感じかな。せみの鳴き声が続いている。頭を傾けると、なぜか聞こえてくる声が大きくなった。元に戻すと、また同じ。思い切り傾けても大きくはならない。少し頭を傾けると、鳴き声が大きくなる。

風が黒い本のページをめくっていく。黒い本はどこから来たのだろうか。あたしの記憶を探してみる。小さい頃から目にしていた気もする。それにあたしは気がついていたのだろうか。いつからここにあるのだろうか。いまはあたしのお気に入りだけど、むかしはそうではなかったね。

あたしは何を見るのだろう。あたしの二つの目は何を見るのだろう。風が吹いていって、世界を揺らしている。あたしは風の姿は見えない。ただ、本のページがめくれるのを見て、風が吹いているのを見ている。あたしは、実際に、何を見ているのだろう。
目を閉じたら何も見えなくなった。そんなの当たり前。当たり前すぎてどうかしてるよな。耳を澄ませば見えるものもあるのかな。確かにあった。微かに雷がなっている。まだ、遠い。実体はなく、音の世界。微かに鳴っている。本当に鳴っているのだろうか。あたしの耳は疑われている。怪しいね。目を開ければ、少しわかる。確かに雷の気配が見える。あたしは何処を見たのだろう。空なのか。ほんとうは何処を見たのだろう。
サンダルを履く。広がった空を見上げる。どんどん、どんどん、空が暗くなっていく。大きな雲に空が覆われていく。
あたしは太陽を探した。太陽はまだ、空のなかに輝いている。そしてあたしに光を与えてくれる。あの太陽が見えるからあたしは、明るいことを知っている。あの太陽が見えなければ、あたしは明るいことを知らないだろう。太陽が空に隠れる。雷鳴は近く、近く。あたしは空に手を上げる。まだ見ぬ雨を求めて空を仰ぎ見る。体で空を受け止めようとする。雨の粒がぽつぽつと落ちてくる。世界は雷鳴に満ちている。大粒の雨が空を埋め尽くし。あたしの方へと落ちてきた。雨粒の一つ一つがあたしに痛さを与えていく。体の表面が水滴で覆われていく。突然の雨に打たれて、そう、あたしは雨に打たれています。生ぬるい雨。空にかざした、手から流れた水水。
流れるみずが体を蝕んでいく。からだを蝕んでいく。からだというか、服を濡らしていく。からだまで染み入るまでは、そんなに時間はかからない。目を開けても、空は見えない。目に見え

ないこの感覚。体に当たる雨の強さが感覚に変わる。もっと、強くもっと強く。生きている実感に変わるまで。雷が鳴れば、涙もでるかな。訳も分からず悲しくなる。何も思わず、悲しくなる。考えられない。

世界とあたしが繋がっている。心が開く、心は開く。目で見なくとも、心は巡る。生きることは巡ること。世界と繋がりながら、巡っていく。世界はあたしと繋がっている。心はあたしの何なのかな。世界はあたしと繋がっていく。あの空の向こうが見えなくても、世界はあたしのそばにある。

守るものは何もない。それは嘘だ、あたしの心のすべてを開いて、すべてを開いて、自由に生きる。自由と真実の間に見る夢をおもい生きる。雨は心を流していく。世界にあるのはあたしの言葉。この地上にあふれている水が、あたしを世界につないでいる。

雨は激しさを増していく。世界が雨であふれ返っているようだ。もう目を開けているのがつらい。あたしは少し俯いて目を閉じ。髪の毛を解く。ふたたび空を見上げる。顔に髪がへばりつく。右手で髪をかき分ける。赤いサンダル、少し重たい。服はだいぶ重たい。

あたしがぐるぐるとあたしの周りを回っている。ぐるぐるぐるぐるとあたしの周りを回っている。何かをつぶやいている。何をつぶやいているのだろうか。雨の音にかき消されて何をいっているのか分からない。口だけが動いている。何をいっているのだろう。あたしがあたしの周りをぐるぐる回っている。雨粒と同じ速さでぐるぐるぐるぐる回っているんだ。だんだんあたしに近づいてくる。だんだんあたしに近寄ってくる。あたしの耳に声が聞こえる。「食べたい」あたしの声は確かに聞こえた。「食べたいんだ」あたしは、あたしを蝕んでいく。あたしがあたしを蝕んでいく。あたしがあたしを食べようとしている。「食べたいんだ」と確かに聞こえる。あたしの目の前にあたしの顔がきた。あたしは微笑んだ。「おいしい」そして、あたしは消えた。あたしは少し食べられた。

服は十分過ぎるほどに水を含んで、重たい。あたしは赤いサンダルを手に持って、裸足で立つ。腕から手の先へと流れる水が赤いサンダルへと向かう。サンダルは水を含んで皮がすこし膨らんでいるきがする。どうかな、気のせいか。

重くなった服を脱ぎすてて、体をお湯で温める。まだ、体の芯までは冷えてなかった。シャワーがやけに人工的なものに感じた。

空には光が差している。あたしは次の服を着て、同じ赤いサンダルを履いている。空は、過去を忘れているかのように、光に溢れている。あの雨は何だったのだろうか。ふと山を見上げれば、虹がかかっていた。とおくでこころが見ている気がした。

十

　たらったたたた、たらったた。今日は盆踊り、納涼祭りですよ。祭り。小さな村祭りだから、サッカーコートの半分も無い小さなグランドで。テントが九棟円形にならんでやぐらを囲んでいます。やぐらの上のほうではぴかぴかと、ライトが点滅しています。
　暗闇の中に明かりがついて、なんか嬉しい。普段は人に会うのは嫌ですが、こういうところならだいじょうぶ。知り合いのテントに行くと、みんな酔っ払ってました。みんな、よっぱらってます。こころが、
　「まあ、すわれーや」
って、ビールの入ったプラスチックのコップを渡してくれました。渡されたので、ビールをぐいって飲んだら、
　「だいじょうぶか？」
って、少し心配されました。
　「あんたが渡したんやろ」
少し怒ったふりをします。
　「まあ、おっちゃんもよう飲むから飲めるんやな」
そういうと、納得したように、あたしのとうさんの方をみてます。とうさんはコップを傾けてました。
　こころはもう結構飲んでるみたいで、少しいつもと違ってます。なんか、おとうさんみたい。お酒飲んでるから。そんな風。
　「おっちゃん、この鮎食べてええの？」
あたしは、隣のおっちゃんに聞いてみます。
　「おお、食え食え」
と、顔にしわを作りながら、おっちゃんは答えます。おはしで、ばらして鮎を食べます。どのひとも「おっちゃん」と「おばちゃん」で呼びます。名前はあまり知りません、顔は小さな頃からしっかり覚えているけど。
　ビールはもういいや。なんか甘いやつ飲も。クーラーボックスから、缶を取り出して、ひとつあける。それが、めちゃくちゃ冷えてて、少し手がジーンってします。こころに、
　「これあげる」
と、飲みかけのビールの入ったコップを渡すと、
　「しゃあないな」
って、飲んでくれました。
　「こっちの方がおいしそうやったから」
　ちびっこが、走り回っているのが少し気になりだしました。なんでそんなこと気になるんだろう。
　結構飲めますね。気づけば、缶が三本になってました。
　「あはは・・・」
あたしは、訳のわからない話で笑ってます。こころが、少し頭を撫でてくれました。少しモノクロになりました。
　「こんな夜中に見えるはずないし」
と、こころは言ってます。あたしは、でも嬉しいよ。

「福引行こか」
こころが千円札を見せながら言ってます。やぐらの向こうでは、おばちゃんたちがテントの下で福引をやってます。くじを引いても、五等ばっかり当たります。なんで、五等ばっかりなん。
「おばちゃん、五等しか入れてないんやないの」
「そんなことないで、ちゃんと一等も特等もまだ入っとるで」
五回引いても、全部五等。袋にラーメンが五個。なんで全部ラーメンなん。ジュースもくれたらええのにな。
「サクラはラーメンばっかりやな」
こころは、ラーメン五つに、懐中電灯がひとつ。
「あんたも、そないかわらんやん」
こころの方を見て笑いました。こころは、べーって舌をだしたとおもうと、急に走ってテントに戻っていきました。
「待ってーな」
あたしは、ゆっくり、いつもより、ゆっくり歩いて追いかけます。
蚊にかまれても、かきむしりさえしなければどーってことありません。すぐに腫れはひきますよ。それに、蚊のことなんて気にしてたら、おいしくお酒なんて飲めませんよね。でも、蚊取り線香は一応炊いてありますね。
テントの外側は直ぐに闇が広がっている。光は僅かなところしか照らすことができないでいる。そのわずかなところに、人は群がり、わいわいしている。わいわい、わいわい。
みんな笑っている。みんな笑っている。あはは、と笑っている。うちのかあさんも、おばちゃんたちと一緒にお酒を飲んでいます。めったに飲まんのにね。
ぐるぐる、回ります、同心円状に、ぐるぐる回ります、同心円状に。炭鉱節にあわせて、ぐるぐる回ります。やぐらの周りを、赤いサンダルで土を蹴りながら、進みます。でも、後ずさりもあるんですよ。浴衣のおっちゃんがたくさん。まあ、ふつうの服のひともいるけどね。あたしも、浴衣着てきたらよかった。汗が額を流れていく。風の涼しさと、祭りの熱気とがあたしを巡っていく。回る回る、同心円状に。どの人の顔も分かります。あたし、ここにずーっと住んでるから。こころも、踊ってます。でもなんだかぎこちないね。おっちゃんが教えてます。「次はこうや」ってな具合に。テープが流れきると、巻き戻されて、再生までのあいだ、おっちゃんの掛け声の中、同心円は崩れません。
「さの、よいよい」
って。同じことを、同じことをしながら、回ります。ぐるぐるぐる、結構楽しいですね。小さい頃は、何が楽しいのか分からんかったけど、今なら分かる気がします。楽しいのですから。
疲れたので、少し休憩。また、缶をひとつ開けました。少しの休憩が、おっちゃんがやってきて、ずーっと休憩になりそうです。
「サクラ、元気しとるんか」
ということが、始まりです。あたしも、上機嫌で缶をどんどん開けていきます。おっちゃんは、どんどん進めてきます。あはは、たのしいなぁ。少しずつ、目を開けているのが億劫になってきたので、交互に左と右とを空けていることにしました。
「じゃあ、またな」
って、こころが帰ります。

「飲みすぎんなよ」
ってね。
「あたしも帰る」
って、こころを追いかけます。少し走りました。こけました。へろへろで、へろへろで、頭がぐるんぐるん回っています。こころは、あたしを起こしながら、かあさんのところへ連れていってくれました。かあさんは怒っています。
「こんなに飲みすぎて、知らんわ」
そんなの気になりません。何か、飲みすぎましたね。ぐるんぐるん世界が回っています。ぐるんぐるん。気持ち悪くて目を閉じていられません。自分の存在を確かめるかのように、目を開けます。ああ、嫌だ、こんな気分は嫌だ。そのうち、トイレと友達になりました。それからはもう、大変だったらしいです。らしいです。
次の日、目が覚めると、頭が回ってます。体なんて、動きません。かあさんがきて
「自業自得やな」
といってます。もう少し、やさしくしてくれんかな。今日もトイレと友達です。かあさんが、これ飲んどきって、黒い漢方薬をくれました。少しは楽になるかな。着ているものは、脱ぎ捨てていました。トイレにふらふらになりながら行きます。そして、布団にばたんと倒れます。トイレの向かいに部屋があって幸いでした。布団の横に、水のボトルを並べてもらいました。でも、口をゆすぐくらいしかできません。なんにも飲み込めません。でも、トイレと友達です。左向きで寝るのが、右向きで寝るよりも、心地いいってそんな違いあったんですね。少し驚き。タオルケットを体にぐるぐる巻きながら、回転していきます。ぐるぐるぐる。頭もぐるぐるぐる。こんな苦しさ、いらないなぁ。ほんと、いらないなぁ。
世界とあたしは繋がっている。空が青く輝いている。途切れ途切れのイメージが繰り返し繰り返しあたしを追いかけている。ぐるぐるあたしは同じところを回っている。後悔が後悔を生んでいく。
なんか、熱出たときみたいな景色だな。熱が出たときと同じ思考の巡り方をしている。ひとつ、眠るたびに、心地はよくなっていく。
水を飲みたいと思ったのは、夕方になってから。ぐるぐるしながら、水のボトルを少しだけ傾けた。トイレに行くけど、まだまっすぐ立てないですね。
夜が過ぎて、朝が来る。でも、まだまだ、布団のなか。昼過ぎるとさすがに、だいぶ楽になってきました。あたしは、タオルケットに包まって、風呂場まで行きます。シャワー浴びたらだいぶ違うやろう。
シャワーからあがって、服を着て思いました。お酒はもういいや。上がったら下がるし、下がったら上がります。

「お、酔っ払い、元気になったか？」
縁側でこころは、すいかを食べてます。
「元気なわけないやろ」
と、横になりながら答えます。吹き抜けていく風が気持ちいいです。
「大変やったんよ。なんであそこでこけるかな」
「知らんわそんなこと」
「でも、酔った顔もかわいかったで」
「聞いてないわそんなこと」
嬉しいような、怒りたいような、複雑系です。
「また、一緒に飲もうで、よっぱらい」
って、こころは帰っていきます。何しにきたんやろ。
「おばちゃん、すいかありがとう。うまかったわ」
家の奥まで声が響きました。

左目で空をみる。手のひらで、右目を覆う。山と屋根の間にあるすこしだけの空。あの空の向こうに世界の果てがある。そして、あたしが待っている。あの空はどれくらい遠くにあるのだろうか。手を伸ばして届くわけ無いけど、一応左腕を伸ばしてみる。少しつかめた気がした。世界の果てには何があるのだろう。やっぱり心のなかでしか行けないよな。

スイカでも食べるかな。縁側に座って、外で塩を振ります。穴が少ししか開いてなくて塩が、少ししかでません。それでも、何回も振って塩をかけます。かぶりつくと、スイカの汁がボトボト落ちて、口のまわりに纏わりつきました。なんか子供みたい。気にせずかぶりつき。
「おいちぃ」
少しのことで心が揺れる、そう嬉しいんです。スイカ自体は少し水っぽい気もしますが、それはそれで。
こころの後姿が見える。見えるこころは小さくて、スイカの種みたい。粒になってしまいました。あたしはこころにめがけて種を飛ばす、唇のの先から、ふっ・・・って。どう考えてもとどくわけない。あたしはあほだ。
スイカの赤いところを食べ尽くす。あとは皮が残るのみ。サンダルを履いて、家の裏に。スイカの皮をちぎって投げる。飛んでけ。飛んでけ。
スイカを食べたけど、おなかがまだ満たされない。そんな食いしん坊なことを思いながら台所で手を洗っていると、おひつが目に入った。あたしはおひつを眺める。しばらく眺めていると、イメージが浮かんだ。おにぎり。思考がおひつから、おにぎりまでいくのは遅かったけどね。おひつのふたをとれば、ごはんが半分くらい入っている。思った通り。常温のごはんをおにぎりに。まずはラップを敷いて、その上に塩をふる。適当にふる。出が悪いや。仕方ないのであたしにしては珍しく、つまようじで穴を掃除する。さっきは、出が悪いまま粘ったのに。改めて塩のビンを振る、バサッと思いのほかたくさんでた。慌てて傾きを戻す。塩を減らそうとラップの上の

塩を指先に付けて取り除く。なんとなく、指を舐めてみる。やっぱり、しょっぱい。いよいよラップの上にごはんをのせる。ごはんには炊きたての頃のような自由度はない。ごはんはおひつに入っていたままの形、そのまま、ラップの上に移動する。おひつの中に入っているごはんをバラバラにして全部取り出したら、パズルみたいにできそうだ。ごはんはラップの上にデンと座っている。俺は動かんって意固地になっている。でも、あたしは力でそれを動かすんです。ラップの四隅をひとつに纏めてごはんをつつむ。ラップが風呂敷みたいだね。すこし形が崩れる。纏めた四隅を持って、グルグルとラップをねじっていく。アレアレ、ごはんはぎゅっとまとまってしまう。いとも簡単に、意固地になってたご飯が変形していく、まとまっていく。そうそう、ねじりの力は絶大だ。ぐるぐるとねじる。あとは、三角に握るだけ。塩おにぎりの完成です。あはは、やっぱりおいしいや。食いしん坊のあたしは満足満足。

一息ついて、お茶を飲む。腹が満ちたところで、さあやるか。縁側にある黒い本がまっている。

座って、黒い本をひらく。ペンを持って書くよ。

『世界の果てにあたしがいていつかいつかとあたしのことをまっているんだ。

世界の果てって何だろうか。そこにいるあたしって何だろうか。そんなこと考えるあたしがここにいる。いつか世界の果てにあたしが行くんだ。世界の果てってなんなのだろうか。そもそも世界とはどこまでが世界なの。

あたしが今あるのは、この家と、その周りと、遠くて、神戸にある予備校まで。それくらいしか思えない。ほとんどは家から二分以内のところ。そして、とうさんにかあさんに、ばあさんに、近所のおっちゃん、おばちゃん、こころ、それくらい。これがあたしの世界。これがあたしの世界。

でもね、でもね。あたしは地球の上にいるらしいです。あたしは、宇宙の中にいるらしいです。だから、きっと世界の果ては、宇宙の端っこにあるだろう。宇宙の先にあるところが世界の果てなのだろう。

でもね、でもね。時間も世界の一部だろう。だったら遠い未来が世界の果てなのかな。そんなに生きれないよ。でも、あたしは世界の果てにいて、あたしのことを待っているんだ。そんなところ。あたしは心でしかそこにいけないな。そう、心でしか行けないんだよ。どこにあるんだろう。世界の果てって何なんだろう。またここに戻ります。』

十一

　モノクロはサクラを美しくさせるよな。たまに見える光が少しうるさいときがあるからね。でも、なんでいつもサクラだけはモノクロなんだろう。大概はそのときによって違うのに。

十二

　海南があたしのところにやってきた。何をしに来たのだろう。「何をしに来たの」って問うと、「遊びにきた」って言う。自動車を運転できるのっていいな。思い立ったら行けるところがあるのだから。あたしなんて、何にも乗れないや。
　海南はとうさんに自己紹介をしている。あたしは、遠くでその声を聞いている。なぜかあたしはその場にいられない。遠くからその声を感じ取るだけだ。何を言っているのだろうか。それは微かにしか感じれない。海南は笑っているのだろうか。あたしがいなくて間をもてあましているふうではない。とうさんは笑っているのだろうか。いつまでも遠くにいるわけにもいかない。あたしは少しずつ近づくことに。
　声がだんだんと大きくなるが、沈黙も大きくなる。とうさんは海南の側から離れていく。あたしは近づいていく。とうさんとすれ違う、あたしは海南のもとへと急ぐ。
　海南は縁側から外を見ていた。肩まで伸びた髪が風に揺れている。
　「昨日ね、模試を受けたんだ」
海南はあたしの方を振り返ると、そう言った。
　「難しかった？」
そんな、当たり障りのない平均的なことをきく。
　「そうやね、まあまあかな」
まあまあか。まあまあってどれくらいなのかな。でも「まあまあってどれくらい」と聞くわけもいかない。そんなことはとてもリズムの悪いことだ。
　「そーなんや、どんなの出たの？」
　「忘れた」
海南はそう一言。海南はなにも無かったような顔をしている。「私、何か話した？」とでも言いたげな表情。少し目を細めて、また外を見ている。
　「まぁ、ゆっくりしていきーよ」
あたしは、そんなことしか言えない。
　「前みたいに、こころ来ないかな」
海南の声が外に向かって放たれる。
　「来るかもね」
あたしは瞬時的にそう答えていた。ほんとうにそうだ、来るかもしれない。だってこころの家はそこなのだから。来るかもしれないし、来ないかもしれない。あたしは、海南の隣に腰掛ける。いつもの位置は海南がいるから、ちょっと今は変な感じ。海南は胸のあたりに手を当てて何か考えているふう。沈黙が耐えられない人ではないからあたしは黙っている。海南も黙っている。足をぷらぷら、往復運動させながら親指の先を追いかけている。一回、二回、三回。という具合に回数を数える。お尻の下に手を置いて。
　海南は胸に当てていた手で胸を掴んだ。掴んだというよりはただ手を握りしめたというほうが正しいのかもしれない。
　「うちな、うちな。嘘つくのすきなんよ。くだらない嘘をつくのが好きなの。くだらないの。なんだろう。くだらないうそ。そう、模試なんてなかったの。そう、模試なんて無かったの。模試なんてなかったの。来るとき思ったんだ。話に困ったら何はなそうかなってね。そこで考えた。くだらない嘘だよ。模試なんて。模試で何書いても、点数しかもらえないんだよ。あんなの嘘

の塊だぁ。勉強なんてきらいだぁ」
　「勉強嫌いになったんや。あたしといっしょやな」
海南の顔が少し緩んだ。前よりも澄んだ瞳をたたえている。空は光で満ちている。山からは蝉の声が聞こえる。
　「勉強嫌いになったのも、うちの嘘。うそうそ、嘘。毎日勉強してたら思うよな。なんでこんなことしてるんやろうって。それで、勉強するの止めるやろ。そしたら、なんかもやもやしたのが浮かび上がってくるんよ。なんかよう分からんけど、気持ちが悪いの。それが嫌やから、また勉強をはじめる。そしたら、なんか少しすっきりするんよね。あたしなんでこんなんするんやろ、そう思って、勉強するのが性にあってるみたい。なんてね」
海南は、舌をだして微笑んだ。自分で言ったことが少しはずかしかったのだろうか。遠くを見ながら、微笑んでいる。あたしは、相槌さえうたない。何を言っているのか良く分からなかったのがほんとうのところだ。海南は何を言っているのだろうか。
　「勉強してると、通り抜ける瞬間が来る。ぱって、世界が全て見えるような気がする。うちは、何でも知ってるよ、って言いたくなるときがくる。それが少し楽しいな。長くは続かないけど、それが好き。でも、テストで点とれないと意味ないけどね。そうホントに意味ない。嘘の塊やの、それがうちを左右するなんて許せないけど。それが入試やしな。入試なんてなくなればええのに」
海南は、また沈黙に戻っていった。あたしはずーっと沈黙のまま。海南が不安になったかな。あたしが何にもしゃべらんから。あたしも、じぶんがしゃべらんのが少し不安になった。海南に嫌われていくかもしれん、そんな言葉が浮かぶからだ。世界は広い、でもあたしはそれを知らない。いま目の前にいる海南があたしの世界。それ以外も世界だけど、海南か、それ以外かしかない。あたしの頭のなかはそんなふうにして区切られていく。
　「なぁ、べつの話してくれへん？」
あたしは、何を言っているのだろうか。沈黙を破る言葉がこれで、会話は成り立つのだろうか。
　「ふーん、興味なかったんや」
　「そう、興味なかった」
海南は、唇の先を少し噛んでいる。あたしの方へ向くと、あたしに口付けをした。あたしは思わず目を閉じた。見ているのが怖かった。目を閉じれば、世界があたしから離れていく気がする。そうしていたかった。世界とあたしがどんどん離れていって欲しかった。あたしは、世界に対して無力だ。なにもできない。動かない。海南が唇を噛んだ。あたしは少し痛がった。
　「すいか、食べさせてくれへん。今日、すいかある？」
海南はそう言った。あたしは、
　「あると思う」
たどたどしく、言葉にする。スイカを切って手渡すと、海南はおいしそうに食べ始める。なぜだか、いとおしくなった。スイカをあたしも、食べている。こころがいつか、言っていたな。「この縁側で食べるスイカが一番うまいって」確かにそのとおりだ。海南に噛まれたところから少し血が出ていた。スイカの汁が少ししみる。
　嘘が上手いひともいれば、嘘が下手な人もいる。あたしは、どちらかと言えば嘘がうまいのかも知れない。でも、嘘をつくときって大抵、気付いたら嘘をついていたということがほとんど。自分から進んで嘘をつこうなんてことはめったにない。海南は、嘘をつくのが好きと言ってる

けど、その意味が良く分からない。嘘なんてつこうと思ってつけるものだろうか。その感覚があたしにはつかめない。嘘は、気付いたらついているもの、そうだとおもうから。まぁ、人のいうことなんて本当は、嘘の塊かもねぇ。だった、だって、あたしは本当のことしか言ってないのに、嘘だと後から気付くのだから。そのときは本心でも嘘になるんだよう。嘘と本当の境目には虚無が存在する。海南は、何を言いたかったのだろうか。
「うちのこと、嫌いになってくれる？」
「ええで」
海南とあたしはそう会話を交わした。世界はあたしを動かしたいのだ。

遺跡から掘り起こしたようにぼろぼろになった英単語帳をとりだして眺める。しばらく使ってないとそのぼろさが懐かしい。記憶の片隅にあるのはぜんぜんテストができなかったこと。電車の中で広げて、じりじりと焦りながら覚えている。十個並んだ英単語とその日本語訳。微妙に唇を動かしながら。十個目を終えると、今度は目を閉じて一つずつ思い浮かべていく。ぜんぜん、覚えてないよ。困難。こんなん覚えれる人は天才だ。なんでこんなん覚えれるのか分からない。頭が違うんやね。
海南がいる。海南は寝ている。目を閉じて、明日を見るために寝ている。海南が電車のなかで勉強してることはなかった。そんな気がする。どこかにかかっていた記憶。
あたしにはやっぱり無理かな。勉強しても出来る気がしません。できる気がしませんよ。頭の中に何も入ってこないのです。ろくでもないことなら、すぐに覚えれるのに。なんとなく忘れないのですけど。いつも見えないけれど、それでいいや。あたしには出来ないのだろう。でも、でも、いやかな。そんなあたしが。

皮膚をつたう負の塊。あたしの表面を覆っていく。あたしなんていないほうがいいんだ。背中、首の付け根を襲う負の塊。あたしの心を哀れにしていく。なぜ、どうして。そんな言葉の繰り返し。もしあのとき、ああしなかったら、ということ。それがグルグルと頭のなかを巡っている。同じことを思い、同じ思いに陥る。たぶんしばらくはこんなことしか頭に浮かばない。あたしは、外の世界で生きていく自信が無い。どこにもあたしのいる場所なんてないんだ。どうせ、嫌われるだけだろうし、どうせ、うまく話せないだろうし。だれも、あたしなんて必要としていないんだ。だれもいないところで、ひっそりと暮らしていこうかな。だって、負の塊があたしを支配して何も手につかないのだから。こんなのじゃ、生きていく意味ない。だって見たいものも見れないんだ。あたしは何かを見たいのに、こんなものに頭を支配されていたら、どーにもならない。肩から腕を、肩から背中全体に、広がる負の塊、あたしの表面を覆っていく。「うちのこと嫌いになってくれる」「ええよ」同じことの繰り返しだ。頭の中を同じことが繰り返される。消えては浮かび、浮かんでは消え。同じことの繰り返し。心にモヤモヤしたものがかかっている。あたしは、そのモヤを遠くから眺めることしか出来ない。目を閉じても同じ、心は同じである。どうせ、あたしなんて、どうせ、あたしなんて。同じことの繰り返し。予備校に行ってたときと同じ感情。だれかと上手くできないこと。皮膚を伝っていく感情。
こんなときは眠るのがいい。眠れば、いつかのあたしに会えるから。

十三

　結局世界はモノクロだ。濃いか薄いかだけ。色なんてあってないようなもの。色も黒が濃いか薄いかだけに置き換わる。
　結局、うつくしいのはモノクロでも美しい。

　だれかの目を持って、この世界を見渡した。だれの目が欲しいのか。アインシュタインか、ニーチェか。それとも、そのほかの偉人の目なのか。こころが欲しているのは、記憶の欠片。欠片を集め、それをあわせていけば何か見えるというのか。でも、美しいのはそこに見えている。モノクロで、見れば見えるんだ。目で見て分かるんだ。記憶ではなく、この世界は、限りなく多くあることが。広がる世界は明日を欲している。

十四

「無理はするなよ」
とうさんに言われた。何のことか良く分からなかったが、無理はするなってことが言いたいのは分かった。たぶん、無理して後悔したことがあったのだろう。「無理はするなよ」あたしの脳裏には、「このまま家にいても仕方ないかな」ということがあった。家にずーっといることに焦りはない。毎日、縁側に座って過ごすのも悪くない。高校生のときはテストのことしか頭になかったから、こんな生活をするなんて思いもよらなかった。勉強は好きでも、嫌いでもなかった。ただ、勉強して分かったときが嬉しかった。それが、喜びだった。もう、勉強なんてしようとは思わない。だって、あんなに勉強したのに・・・。
世界のことなんて何も分からない。ただ、なんとなく、教科書を眺めていただけだった。それが、テストに出るか、出ないか、割り切ることが大切であった。成績は下の上くらい。それがつらかった。どんなに勉強しても越えられないことがある気がした。たぶん、それは気のせいなの。
「無理するなよ」
そのときのあたしに言えばよかった。こころのことだけ見てればよかった。
こころは、あたしより二つ年上である。いまは、大学にいっている。家から通うために、車を買ってもらったみたいだ。縁側から、その車が止まっているのが見える。今日は、家にいるんだな。こころが見えるかもしれないから、この縁側にいることが多いのかもしれない。いや実際そうだろう。
「無理するなよ」
とりあえず、あたしは自分に向けて言ってみた。
少し、眠ろう。タオルケットを引き寄せる。
あたしがここで裸になってたら、こころはなんていうかな。あたしのこと見てくれるかな。いつもはあたしが、そんなに見ていても何もでないですよ。とか言っているから、そんなの見せても何もでないですよ、って言うかもね。でも、こころじゃない人だと恥ずかしいな。こころに彼女はいるのかな、そんなこと聞いたことないや。まぁ、おらんとか言っても嘘としか思えんけどね。でも、嘘でもいいからいないって言ってほしいな。
何勉強してるって、聞いたら、「サクラのこと」って答えたっけな。

なんとなくわかる。どこに行こうとしているのか。なんとなくわかる。ここにボールを蹴れば、気持ちいいだろうなというところが分かるかんじ。時代が動いていくのがわかるかんじ。大きなのは常に狙っていないとな、でもリズムをつくる小さいのも重要だ。大きいのばかりだと疲れてしまって最後のほうにやられちゃうかんね。なんとなくわかる。そのかんじ。あたしは小さいのは苦手だ。でも、大きいのばかりで失敗が多い。流れを変えるのは、何だ。時代を推し進める力になれるかどうか。見ればいいよ。そしたら感じれるから。なんとなくわかる。この時代がどこにいっているのか。なんとなくわかる。みんな考えるのが面倒になっていることが。先が見えたと勘違いしていることが、あたしもそうだ。あたしも、勉強に先が見えたと勘違いしていた。大きな勘違い。本当に勘違い。だれのせいでもない。ただ時代がそうさせているのだ。見えていないのは、あたしだ。だれが悪いわけではない。高校が悪いわけではない。ただ、だれかの思い込みが悪いのだ。常識だと思い込んで、安心してしまうのが悪いのだ。世界はいつも変化を求め

ている。だからこそ、生きているのだ。だれの真似もするな。真似すれば、落ちるだけだ。底の無い世界に落ちるだけだ。記憶の黄昏を歩んでいけ。そうすれば、少しはましな生き方ができるだろう。世界はお前を欲しているんだ。だれでもないお前を欲しているんだ。あたしの記憶はだれの物でもない。だれの所有物でもない。どこかにある世界の果てに、そう、世界の果てにただ依存するものだ。消えるな、消えてはいけない。ただ、考え、感じろ。その繰り返し。不安の中、考え、感じろ。世界は広く、世界は多く、世界はうつろい行くもの。聞こえてくるだろう、時代の声が、そう、海南の声が聞こえてくるだろう。「こころ」と呼ぶ声が。あたしの「こころ」という声でなくて、海南の「こころ」と呼ぶ声が。聞こえるだろう。それを知ればいい。「あなたはだれ」そんなことは気にしなくていい。わからないけど、感じとれることはあるだろう。わからないけど、考えることはあるだろう。考えて、感じる。感じて、考える。その繰り返しこそが、美しい。空を見れば、星が輝いている。記憶を巡れば、欠片が瞬いて去っていく。浮いては沈み、沈んでは浮き上がる。

テレビの画面から、こぼれてくる映像。どこの国の試合だろうか。ボールがどんどん動いていく。この選手好きだ。なんとなくだけど。すごいスルーパス出す選手だから。それに、ロングシュートが上手いしね。サッカー選手にしたら不細工だけど、あたしとっても好きだな。左足が輝いて見えるよ。

浮かんでは沈み、沈んでは浮かぶ、流れがあるのかな。考えるな、感じろ。感じるな、考えろ。どちらも同じ。どちらも同じ。ただ、言い方が違うだけ。それが大きな違い。あたしの体を伝う形の変わる「こと」と「もの」。纏うのは同じ。人としてあるという意味。昨日とか、今日とか、明日とかが当たり前のようにあることに、疑いを挟みこむあたしの思考。だれかの上で生かされることを否定もせず、肯定もせず、ただそうであることのみを知る。あたしを生かすのは、あたしだけだ。だれでもない、あたしだけなのだ。自由と真実に縛られながら、それでも飛びたいと願っている鳥のように、見たいものがあるのだと、そう言い放って飛んでいけばいいじゃあないか。それがあたしの言葉なんだろう。全ては知っている。でも全ては知らない。だれも、あたしのことを知らないように、だれも世界のことを知らない。世界は美しい。だからこそ、ここにあるんだ。

十五

「あした、うちでバーベキュウするから来いよな」
こころから電話があった。あたしは、すぐに答える。
「わかった」
かあさんに、言ったら、「じゃあ、スイカでも持って行き」やってさ。

夕方にこころのうちに行くと、知らない人が何人かいた。こころが言うには、大学の友達とか。あたし、しゃべれるかな。
「どーしたらいいん」
こころに、聞いたら、
「適当に飲めばいいやん、もし嫌になったら、こっそり帰っていいよ」
ということでした。どうも、みんなあたしより年上みたいですね。
「なんていう名前なの」
って、真っ黒に焼けた人が聞いてくる。
「サクラ」
と、少し小声で答えました。やっぱり、うまく話せないかも。そしたら、その人の隣にいたお姉さんが、
「あたし、京子っていうんだ。よろしくね」
ビールをくれた。
「こちらこそ」
あたしはビールを受け取る。ぎこちなかったかも知れないが、少し微笑んだ。
「こいつ、サクラです。あすこに住んでんの。いまはニートです」
とこころが、あたしの家の方をさす。
「こちらが直緒さん、こっちが健蔵、こっちが京子、でこれがうちのおやじ」
「おっちゃんは知ってるよ」
とりあえず、突っ込みをいれておく。こころが、紹介してくれた。とりあえず、乾杯。ビールがあいていきます。ドラム缶を縦に半分に割って作ってある、コンロが大活躍。炭火が網の上の肉を焼きます。じゅーじゅー。こころのところのおばちゃんがきて、
「サクラちゃん、いっぱい食べよ」
といいながら、おむすびを渡してくれました。ビールを飲みつつ、おむすびを食べます。おむすびの中には、昆布が入っていました。ビールを一缶飲み終えると、まあ緊張もやわらいできて、少しは人の顔が見えてきました。京子って名乗った人は、こころにビールを渡しながら、何か話してます。あたしは、大半はこころの方を見てます。缶ビールをもうひとつ開けると、少しは話に参加できるようになりました。まあ、相槌打ったり、するだけですけど。やっぱり、楽しいです。少しの不安はありますが。
京子さんがいいます。
「海南って知ってる？」
「知ってますよ、高校一緒だったから」
「あたし、海南といとこなんだ。あたしも同じ高校。こころと同級生。でもきょうちゃんって呼んでね。きょうこさんなんて言わんでね」

きょうちゃんは言いました。なので、あたしは
　「きょうちゃん、サクラって呼んで」
と言いました。
　「ちょっと、隣きーよ」
と、きょうちゃんが呼んでくれたので、横に座ってビールを飲みます。二つ違うと、習った先生も違うけど、少しは話が通じます。とりあえずこころより賢くて、国立大学に行ってるらしいです。
　「サクラちゃん、きれいな目してるね」
　「褒めても何もでないですよ」
　「ほんとうに」
きょうちゃんは、少し酔っているのか、あたしに寄ってくる。
　「スイカ食べる？」
と、きょうちゃんに聞くと
　「うん、食べたい」
と、即答です。じゃんじゃかじゃん、スイカを食べます。とりあえず、うちから持ってきたスイカを探します。
　「おばちゃん、スイカどこ行った？」
　「そこに冷やしてないか」
と、水槽をさしてます。スイカはいつものようにプカプカ浮いてます。
　「おばちゃん、包丁かして」
　「ええで、切ったげるよ、こっちまでもってきて」
と、あたしと、きょうちゃんは台所までスイカを運びます。一人でもてるけど、無駄に二人で運びます。
　まな板の上で、スパって切れます。あとは、すいカバーがたくさん並びます。
　「はいどうぞ、はいどうぞ」
あたしは、みんなに配って回りました。こころはビールを片手にスイカを食べてます。寝てる人にはスイカはあたりませんよ。二人ねてました。スイカを食べる。いつもなら、種もばりばり食べるけど、人前なので少しずつよけながらたべます。思わず口に入ったのは、フッてして、とばします。でも、地面にそのまま、ボッと落ちました。へたくそです。
　「わたしも飛ばしてみよ」
きょうちゃんも、スイカの種を口から、フッと。あたしよりは飛びましたね。
　「勝ったね」
きょうちゃんは、あたしの肩を叩いています。少し悔しいけど、あははって笑いあいました。あはは、結構楽しいです。
　ビールの酔いが、少し覚めてきて少し体が重く感じます。あたりも暗くなってきて、蚊が飛んでいます。左手の小指が刺されて腫れています。少し掻いたけど我慢します。

　「サッカーしよーで、サッカー」
直緒さんが張り切っています。
　「真っ暗で何にもみえないですよ」
ぶつぶつ言いながら、こころがサッカーボールを車からだしてきました。こころと、直緒さんと

、健蔵が三人でリフティングを始めました。
「三回落としたら、罰ゲームな」
「京子と飲みくらべる罰ゲーム」
「それ、嫌ですね」
「ビールひたすら飲めよ」
そんなふうにして、直緒さんとこころと健蔵がリフティングを始めました。だれが負けたんでしょうか、それはそれは、たぶん。

きょうちゃんは、元気です。
「けん、飲めよ」
って、健蔵にビールを奨めてます。どんどん、健蔵はビールを飲んでいきます。直緒さんとこころはきょうちゃんから距離を置いて、二人で笑っています。
「あほや、あほ」
あたしは、こころの父さんに、ビールを奨めます。おっちゃんは、
「美人と飲むと違う」
と、あたしに言います。いつものように
「そんなん言っても何もでんよ」
と、言っておきます。おっちゃんは、嬉しそう。おばちゃんも、あたしの隣にきました。おばちゃんは、
「ビールの飲む歳になったんだ」
と、感慨深そうです。まじまじとあたしの顔を眺めています。あたしは、少しづつ顔が赤らんできました。耳が熱くなってきます。
「照れんでもいいのに」
って、肩を少し叩かれました。
「彼氏いるん？」
「いないですよ」
「好きな人は？」
「一応」
とな。
「こころのことは、好きになっちゃだめよ」
あたしは、顔がまた熱くなりました。
「うん」
と答えるのが精一杯。

こころのうちにとまることにした。きょうちゃんと並んで寝る。寝る前にきょうちゃんと少しおはなしをした。
「こころがいつか言ってた、わたしが左目なんだって。いつだったかな、高校の三年のときだった気がする。なんのことか分らないけどね。左目だなんて言われてもねぇ。こころにはモノクロが見えるんだって、モノクロって言われてもわかんないよね。たぶん、世界がモノクロにみえるんだろうね。色が欠けているんだろう。でも、たいがいの物はちゃんとみえるらしいよ。モノクロのものが点在するって言ってたな。あたしは、いつもモノクロらしいね。モノクロってなん

なんだろう。こころは、色がついてない方がいいね。って言ってた。慣れたら、こっちの方がいいって」
あたしは、ふんふんとうなずきながら聞いていた。きょうちゃんは、なんだか悲しそうだった。こころは何も話さないから、分んないことが多い。でも、あたしはそんなところが好きだ。だって、分ったところで、何にも変わらないから。ただ、あたしが何かを失うだけ。
「わたしは、なんていうのかな、いろいろこころのことが知りたくて、知りたくて。でも、聞けないんだよね。こころも言わないし。だから、わたしのこといろいろ話すんだ。こころはいつも、うんうん、って聞いてくれるけど、やっぱり、本当は、こころの話が聞きたいんだ」
話しながら、きょうちゃんは少し涙ぐんでいる。あたしは、左目できょうちゃんを見た。少し目がモノクロに見えた。
「へんな、はなししてごめんね。じゃあ、おやすみ」
きょうちゃんがあたしに微笑みかけると、涙がほほを伝った。あたしは、気づかない振りをして、タオルケットをはおった。
「おやすみ」

次の日、家に帰ると
「遊び人、飲みすぎんかったか」
って、かあさんにからかわれた。
「そんなに飲んでないよー」
と、言い返しておく。かあさんは嬉しそうだった。あたしが遊びに行ったからかな。家に帰ってから、少し寝た。良く眠れた、深く深く眠れた。
おじいちゃんがいる。あれ、おじいちゃんはまだ死んでないんだ。おじいちゃんは今にも死にそうなくらい弱弱しくたたずんでいる。あたしは、何かに追われている。村が、何かに襲われて、壊れていく。村から、逃げ出そうとしている。車で逃げる。ガソリンが少ない。どこまで、逃げれるだろうか。安全なところまで逃げれるだろうか。道路には、車がときどき走っている。大勢の人は、逃げ出そうとしない。とくに、なにごとも無いように、いつものように暮らしている。新しい支配を受け入れようとしているのかな。そんなことは分からない。あたしは、おじいちゃんのいる家を、おじいちゃんを置いて出て行く。おじいちゃんは笑っている。サクラよ、サクラよ。って笑いながらいっている。あたしは、涙がでてくる。
そして、飛んだ。少し、覚める。また、続く。
いつかの、あたしがいる。ここは、だれもいない岩の上。あたしのことは、だれも見ていない。あたしの眼下には、村が小さく見える。ここから落ちれば、死んでしまうよな。そんなことは、当たり前のこと。あたしは、少しづつ前にいく。少しずつ岩の先の方へいく。いつもは、高いところなど足が震えて怖いのに、どんどん進んでいく。そして、ここが境界だとおもい、そこに座り込む。これから先にすすめば、いのちはない。その河岸に座り込み。あたりを眺める。あたしの生まれ育った家が見える。こころの家も見える。車が道路を走っていく。小学生が家に帰っていく。あたしのことはだれも見えていない。それに、見えたら大騒ぎ。風が吹き抜けていく。あたしは、生きるべきかそうあたしに問うたことを知っている。たしか、高校の時かな。その答えをあたしは心に持って過ごしている。あたしは、立ち上がり、大きく一歩下がる。岩から、山のなかへ帰っていく。これは夢だと知っている。

十六

縁側に座ってぼーっとする。夕方になると空が曇ってきた。夕立がしそう。遠くで雷がなっている。実体はなく、光だけがあらわす世界。目に見えるものはすべてではない。あたしが見る真実も自由も世界の一部。ただの一部、でもあたしにとっては全て。言葉が世界を越えていく。その意味すら分からない。

サンダルを履く。そして空に手を上げる。雨の大粒がぽつぽつ。体の表面が水滴で覆われていく。突然の雨に打たれて、そう、あたしは雨に打たれています。生ぬるい雨。空にかざした、手から流れた水水。

流れるみずが体を蝕んでいく。からだを蝕んでいく。からだというか、服を濡らしていく。からだまで染み入るまでは、そんなに時間はかからない。目を開けても、空は見えない。目に見えないこの感覚。体に当たる雨の強さが感覚に変わる。もっと、強くもっと強く。生きている実感に変わるまで。雷が鳴れば、涙もでるかな。訳も分からず悲しくなる。何も思わず、悲しくなる。考えられない。

世界とあたしが繋がっている。心が開く、心は開く。目で見なくとも、心は巡る。生きることは巡ること。世界と繋がりながら、巡っていく。世界はあたしと繋がっている。心はあたしの何なのかな。世界はあたしと繋がっていく。あの空の向こうが見えなくても、世界はあたしのそばにある。

守るものは何もない。それは嘘だ、あたしの心のすべてを開いて、すべてを開いて、自由に生きる。自由と真実の間に見る夢をおもい生きる。雨は心を流していく。世界にあるのはあたしの言葉。この地上にあふれている水が、あたしを世界につないでいる。

雨は激しさを増していく。世界が雨であふれ返っているようだ。髪の毛を解く。顔に髪がへばりつく。赤いサンダル少し重たい。服はだいぶ重たい。きょうちゃんのことが巡っていく。あははってあたしの肩を叩きながら笑っている姿が、ぐるぐるとあたまの中を回っている。体を蝕んでいく。きょうちゃんがあたしを食べていく。あたしは少しだけ食べられた。

重くなった服を脱ぎすてて、体をお湯で温める。まだ、体の芯までは冷えてなかった。シャワーがやけに人工的なものに感じた。

いつかと同じ。いつかと同じ。でも、少し違うかな。

雨上がり、きょうちゃんがあたしの中を巡っていく。記憶を犯して、あたしのなかの全てを占めている。どんどん、おなじ景色が浮かんでいく。鮮明になったり、ぼやけたり。あたしの体はだれを知っているのだろうか。なぜ、きょうちゃんなのだろう。出来れば、会いたくなかったな。こころがいるだけでいいから。雨があたしを冷やしてしまった。少し冷えたあたしはおいしくなっただろうか。記憶を持たないあたしの方がおいしかったのではないだろうか。世界は安易に動いた。そして、消えてしまった。雲ひとつ無い青空が広がってしまった。

あたしはふたたび、そとに出る。濡れてしまった赤いサンダルを履いて、外に出る。また、何かやり直しだ。また、やり直し。あと何回、やり直せばいいだろうか。無限なんてないから、少し気が楽だけど。いつまで、きょうちゃんが体を蝕んでいくのだろうか。それが少し不安。でも嬉しい。

十七

　神戸の三ノ宮に、あたしの行くべき予備校がそこにある。かあさんに、「ちょっと出かけたい」って言ったら、お札をもらった。この前、外出したときは直ぐに帰ってしまった。あたし行けるかな。電車の中では、ぼーっとしていた。窓の外の景色が少し眩しい。人がいっぱいいるのがだいぶ苦痛だ。
　JRの三ノ宮。とりあえず、北の方に歩いてみる。ぶらぶらぶらと歩いてみる。どんどん、あたしは抜かされていく。予備校の前を通り過ぎ、坂をあがっていく。知らないところにでたので、引き返す。予備校の前まで引き返す。だれにも、会いませんように。予備校の前を通り過ぎて、ぶらぶらする。
　コーヒーショップに入っていく。アイスティを頼んで、席を探す。禁煙席に、空席が。あたしは、煙草はあまり好きではありません。グラスについた水滴を見ながら、これからどーするか考える。服屋さんでも行こうかな。
　「サクラ？？」
肩を叩かれた。どこかで聞いた声。ふと見れば、きょうちゃんがいた。
　「ひとりなの？」
と、きょうちゃんが聞く。
　「ひとりなの」
と、あたしが答える。
　「ここ座ってもいいよね」
　「どーぞ」
あたしは、少しぎこちない笑顔を浮かべてしまった。きょうちゃんはそんなこと気にしない。オレンジジュースとサンドウィッチをテーブルにおいて、微笑みかける。
　「遊びに来たの？」
と、きょうちゃんがたずねる。あたしは、少しうなずく。まだ、ぎこちない笑顔。
　「リラックス、リラックス」
きょうちゃんは、ジュースを飲みながら、デンと座っている。サンドウィッチを食べながら、きょうちゃんはこころの話をしてくれた。
　「あたし、買い物いくんで」
と先に席をたとうとしたら、きょうちゃんが
　「もうちょっと、待ってくれへん？わたしも良かったら一緒にいきたいから」
と。あたしは、少し自然な笑顔で答えられた。
　「うれしい」
と、一言。
　きょうちゃんについていく。デートみたいに、あたしは嬉しい。まだ、会うのが二回目なのに。服屋さんで、きょうちゃんが選んでくれた。ワンピース。あたしも、きょうちゃんに選んであげた。長そでシャツ。雑貨屋さんに行って、わいわいする。靴屋さんで、きゃっきゃする。すこしずつあたしは自然な笑顔がでている。喫茶店で、おいしいチーズケーキも食べた。きょうちゃんは、またオレンジジュースを飲んでいた。きょうちゃんはスタイルがいい。あたしも背は高いほうだけど、きょうちゃんはあたしより、五センチぐらいは高い。百七十センチあるんじゃないかな。

　きょうちゃんの歩く後を必死であたしは追いかける。だいぶ体が重くなってくる。
　「ごめん、あたしもう帰るわ」
そうきょうちゃんに、言う。きょうちゃんはあたしの顔をみると、あたしの疲れをさっしてか
　「ごめんね、連れまわして」
と、少々困った顔をした。
　「わたし、寄るとこあるから、よかったらまた遊んで」
きょうちゃんは、さばさばと言って、歩いていった。少し遠いような、少し近いようなそんな背中をあたしは見ていた。
　電車の中では、ずーっと寝てしまった。一回ある乗り換えをしてからも、ずーっとねていた。少し涙が出ていた。

　地平線なんてみたことないな。山のなかで育ったからな。山を見上げて、太陽におはようっていうのが毎日の朝の習慣。空が赤くなれば、煌いてその果てに星をみるんだね。その星が太陽っていう名前だっただけ。月ではなかったんですね。その星が声をあげて喜んでいる。今日も生きろって、光をくれるんだ。その声が良く聞こえるのが朝だった。朝が越えていくのはこの生活。それは、過去のことだ。そう過去のこと。予備校も、高校も、中学校も、小学校も、幼稚園も、過去のこと。朝日と共に出発する場所、それは過去のこと。いまでは、声が聞こえない。耳を塞いでいるからか。冷たい目をして、身にかかるものを全て切り捨てていく。空はいつも青かったわけではないけど、心に残るのは青い空。その果てから登る星の声。やさしい過去。それは今も胸の中に。

十八

　きょうちゃんに会った次の日のこと。縁側でぼーっとしていたら、こころが
　「飯食いに行くか」
と、来た。十時過ぎ、あたしはさっきご飯を食べたばかりです。少し間があったけど、
　「行く」
あたしは、答えた。
　「上がってテレビでも見といて、準備するから」
たぶん、こころの好きなドラマ「継続」の再放送がしている。あたしは、昨日のワンピースを着ることにした。あたしの準備が終わっても、ドラマは終わっていない。
　「これだけ、見てもええか」
と、こころが言う。あたしは
　「ええよ」
と、こころの隣に座って一緒にみる。こころが、あたまを撫でてくれた。
　やっぱり、モノクロが広がる。今回は、少し妙なモノクロ。空がモノクロに見える。いつもはそんなことないのに。雲が流れていく。テレビは、刑事がトートバックの中身をぶちまけているところだった。でも、あの人は勉強できるんだよな。すごく羨ましい。こころは、テレビに見入っている。

　パスタを食べるお店に行く。
　「かわいんやから、もっと笑いなよ」
　「だれもおらんとこやったら、笑ったり、怒ったり、喜んだり、自然に出来るよ」
　「そんなん意味ないやん、人目ないとそんするで」
　「そーかな」
　「まあ、そんなもんやろ、テレビみてみーや、芸人さんみんながみんなふだんあんなにおもろいわけやないっていうやんか」
　「そうか、でもなあ、いまでこうやったからなぁ」
　「そんなん気にすんなよ」
　「気にするよぉ」
　「ワンピースかわいいやん」
　「そーおぉ」
　「そーおおぉ」
　「昨日ね、きょうちゃんに選んでもらったの、いいでしょ。三ノ宮で偶然会ったの。きょうちゃん、背高くて、美人やし。あたしに優しくしてくれるんよ。チーズケーキも一緒に食べた」
　「よかったやん。楽しそうやね。京子はなんか言ってた」
　「べつにー、また遊ぼうねって」
　「そうか。よかんたやん」
　「よかったやんばっかり・・・」
　「そうか」
　「ねっねっねっ、このパスタおいしいね」
　「そうか、よかったやん」

「また、言った・・・」
「わりぃ、わりぃ」
「こころは、きょうちゃんのことどう思ってるん」
「なんで、そんなこと聞くん？」
「なんとなく」
「じゃあ、答えない」
「ふーん、じゃあ、いいや」
「サクラは、京子のことどう思う？」
「ともだちになりたいなって・・・」
「もう友達やと思うけどな」
「あたし、あんまり自信ない」
「なんでぇ」
「なんとなく」
「自信持てよー」
「京子、サクラと遊べたって喜んでたんよ」
「じゃあ、自信もとかな」
「また、遊びに行けばいいやん。たまには、おれもよせてな」
「えー、どーしよっかな」
「じゃあ、ええわ。」
「うそうそ、遊んでよ」
「じゃあ、エッチなことしようか」
「そんなん、しません。べーだ」
「うっそっ」
「大学いつから？」
「十月から。で、サクラはいつまでニートなん？」
「うーん、そうやな、そろそろ、何かせななぁ」
「大学は受けるの？」
「今は、勉強してない」
「それは、厳しいなぁ。でも、なあ。おばちゃんも、おっちゃんも、大学いって欲しいみたいなこと言ってたから」
「そーなんや、何も言わんけど・・・」
「言いづらいやろ」
「そうやろな。とりあず、いまのままで退屈はしてないから、このままでええかなって」
「・・・それは、ちょっと甘いで」
「そうかも、しれん」
「いや、絶対甘いな」
「そんなん、言わんといてよ」
「ごめん、ごめん。泣くなよ」
あたしは、あたまをなでてもらった。
「ごめん」

空までの距離って変わっていく気がする。今日は空が遠い。空が遠い。どこまでも向うにある気がする。声が聞こえる、空から降ってくる声。聞こえないはずの声も聞こえる。あの果てから、再び帰ってくる。空の声、太陽の光。
いつもあたしは自分の場所を知りたがっている。あたしがどこにいるのかわからないことがとっても不安なことだから。
気を失っていく。気が遠くなっていく。そして、気がつけば、わけのわからないところにいる。今まで見たこともないような場所にいる。それに、あたしは頭がおかしくなったみたいで、感じたことのない感覚に襲われている。それが引き金となり、心が折れてしまいそう。知らないところにきて、恐怖におののいて、その場所にしゃがみこむんだ。あたしは動けない。
二つの眼で。見る。どこをあたしは見ているのだろう。この目が世界との鍵。怖いけれど、見てみる。そう、あたしは何処にいるか知りたいんだ。見たくないけど、見ないと知れない。
少し手前にあるのは、光。その光は、形を成していく。何だろうか。どこか人のように見える。ぼやけながら、人の形を持つ光は消えていった。声は失われた。
いまいるところがどこであるかわかることは、単なる思い込みに過ぎないの。どこにいるかなんてほんとうのところわからないのだから。何となくわかった気になって安心しているだけ。それだけのこと。だから、どこにいるかなんてほんとうはわからなくていいのだろう。でも、わからないと不安であたしが崩れてしまうよねぇ。そう、その不思議。あたしはどこにいるのか知った。あたしはどこにもいないの。声が聞こえる。だれの声だろう。こころの声が聞こえる。
「今日はいい天気やな」
「そうやね、ほんまいい天気や」
空がもっと遠くにいってしまいそう。声が聞こえる、けどあたしは声が音にしかならない。空が遠いから、声も遠くなってしまった。あたしは、何を思えばいいのかな。海南。きょうちゃん。
世界は広い、でも、あたしはその本当を知らない。だれかの書いた太陽系の図は見たことあるけど、人類は月までしか行ったことはない。それに、あたしは地球の表面にへばりついているだけ。それなのに、世界の広さを知っている。これは、滑稽な話。
「世界ってひろいんかな」
こころに少し投げかけた。こころは、空を見ながら、笑っている。
「世界は、世界やろ。ほかの何ものでもない」
声が聞こえる。すごく近くに聞こえる。あたしの目よりも近くに聞こえた。空までの距離、あたしの目測はあたしにしかわからないけど、きょうの空までの距離は忘れない。あたしの見た空では、遠いほう。

十九

　座って、目を閉じる。
　あたしは、何もいらない。何もいらない。でも、あたしがいなくなってしまうことは怖い。あたしがいなくなるってどういうことなんだろう。心と体がなくなってしまうことなのかな。消えてしまうのが怖い。いつかは、ここから無くなるのだけど、それでも、消えてしまうのが怖い。
　「人はいつか死ぬ、遅いか早いかだけだ」
そういいきれない。心がなくなるのも、体が存在しなくなるのも嫌だ。
　始めから分かっている。生まれたら死ぬ。生と死は表裏一体、離れられないんだ。太陽も地球もいつかはこの形を保っていられなくなる。きっとこの宇宙さえも。
　あたしは、いつか死ぬ。そのいつかは分かっている。でも、あたしは知らない。消えるのが怖い、遠い先の未来のことだとしても、いなくなることは怖い。心と体が宙に浮いたみたいになる。訳の分からない不安があたしを侵食していく。
　あたしはあたしと対話する。光を遮れば皮膚から感覚が内に向かう。風があたしを撫でる。あたしの指定席、縁側。
　忘れていた。気がつかないふりをしていた。あたしは、いつか死んでしまうんだということを。おじいちゃんもお墓で眠っているしね。あたしも、いつかは。不安な心と体を、あたしにさらす。何もしたくないな。あたしが折れてしまいそう。まさにいまのあたし。社会的なあたしの状況。家族以外の人にとって、あたしは存在しないも同然。あたしは家族のみと繋がっている。これがあたしの望みなのかな。いいえ、ちがうはず。あたしはこころとつながっていたい。
　あたしは何もいらない。ただ、こころがいてくれれば。
　あたしは、いつか消えてしまうのだしね。
　辺りが、やけに澄んでいる。聞こえる音が鮮明になる。ありの足音すら聞こえてきそうだ。恐れと不安が、晴れていく。太陽は燃えている。

　気がつかない振りをしてやり過ごしたり。嘘をついてやり過ごしたり。走って逃げてやり過ごしたり。ぶつかって、ハートが玉砕してしまったり。
　おもいっきり
　「わー」
叫んだら、言葉になった。見えないものは見えない。あたしに必要なものも見えない。モノクロの世界を想像する。あたまを撫でられる感じを思い出しながら。全部が白と黒。濃淡だけが、識別できるはず。あたしは、モノクロの先に色を思い浮かべてしまう。ものくろをモノクロと捕らえられない。あふれるものに目を奪われてしまっている。美しいはずのものに気が付けない。こころには、モノクロが見えるらしい。それは、すごく当たり前のことだった。こころも気に留めていないし、あたしも気に留めていない。
　もし世界の全てが灰色なら、あたしは存在しないだろう。きれいな色水のように均一ってことだから。世界が均一になったら、何がそこにあるのだろうか。いまは、揺らぎのゆえに、あたしは存在している。灰色とは、均一ってことだろう。一色になれば、世界はおわるだろう。だって、それ以上変化しないのだから、つまり世界が死んでしまうってことだろう。いつかそんな日も来る。でも、あたしはそのことが怖い。地球は、宇宙の揺らぎ。世界が、確率からなっているな

んて信じないけど、揺らいでないと、何も存在しない。白と黒の間で揺らいでいるから、何かが存在するんだ。
　あたしは、コインを投げている。ひとつの面にはイルカ、もうひとつには人魚の絵が描いてある。コインをはじく。イルカ、イルカ、イルカ、イルカ、イルカ、イルカ、イルカ。
　「イルカばっかり。」
イルカ、イルカ、イルカ、イルカ。
　「いないよ」
イルカ、イルカ、イルカ、イルカ。
　「つまんないな。ドキドキするけど、つまんないな」
イルカ、イルカ、イルカ、イルカ。
　「５２４２８８」
イルカ。
　「１０４８５７６、もう頭がパンクしそう」
人魚。

　目を閉じて、数秒待つ。目を開けたときに広がる世界が、好き。

　あたしは、どこに行きたいのだろうか。どんな暮らしがしたいのだろうか。どう生きたいのだろうか。記憶を辿っても、何も見えません。どこにある記憶を辿ったの。その記憶違っていないだろうか。違っているよ。記憶の欠片、この目がみた記憶の欠片。あたしの見た色の記憶。どこかにあって、空を駆けていく記憶。ふと見上げれば、そこにある欠片。右目で見たか、左目で見たか。見えるのは、見えない。それが本当のことだといいね。ろくでもない空を見上げて、ひとりであたしは考えるんだ。これから、どれくらいあたしはいるんだろう。この世界にあたしはいつまでいてるんだろう。記憶が巡る限り、この世界にある。だれか、あたしを越えていって。そしたら、そのあとをついていくからね。
　何に触れていたい。何を感じていたい。体を巡るものが、あたしを動かしていくからね。それが欲しいもの。あたしは、魅せていきたいの。魅せていきたいの。だれを魅せようかな。だれを欲しいのかな。それは、それは、どこかにいる人。それは、ここにいる人。そう、あなたになら分かるでしょう。分かるでしょう。記憶のなか。

　自由と真実の答え。その言葉に含まれている意味。いつものように知りたいと願う。でも、願うだけでかなうものでもないよね。それはあたしの体を巡っていくかどうか。世界なんて、どうにでもなる。世界なんてどんな形でもいい。それを知らないから、記憶を捻じ曲げて、一つの答えをみようとするんだ。ゆっくり考えればわかるだろう。記憶が捻じ曲がっていくのが。だんだん、捻じれていくんだよ。どこかに依存して、だれかに依存して、そうやって、考えなくなって、なんとなく誰かと、何かと同じで安心して生きるのは、否定すべきことではないか。あた

しをそんなのに浸してしまっていいのか。そんなんで、あたしは魅せれる人になるとでもいうのか。記憶はどこかにある。それが、否定しているだろう。考えて、考えて、考えて、ずーっと考えて、その果てに見るものが、世界に対しての言葉になるの。そんなあたしの思考が大事なの。昨日よりも、今日考えることが美しい。儚く消えていく思考も、その刹那の定めゆえに美しい。消えゆくものを追い求め、言葉になれない、言葉を巡らせる。あたしの中を通り過ぎていくことが、あたしを永らえさせる。考えろ、もっと考えろ、言葉をめぐらし、体で感じろ。それが、果てまで続くと思え、そうすれば、すぐに啓かれる。それが、あたしの言葉になる。消えてしまえ、言葉なんて、見たものをすべて取り込んで、そして捨てていく。どんどん、あたしのなかを流れ去る。悲しいかな、あたしは刹那しか見れない。

だれかが知っていても仕方のないことだ。あたしが見たいのはあたしにしか見れないから。だれかのことを羨むことはない。そうだ、あたしが見たらいいだけだから。あたしが見ないと、あたしにとっては意味がない。だれかの受け売りなんて何も知らないのと同じ。あたしが見ないと本当のところは見えないからね。あたしは、旅をしているのかな。この『黒い本』にあたしを書くことで。あたしは旅をしているのだろう。見たいものを見ようとして、この本に書いているんだ。あたしは黒い本に手を当てる。黒い本は微かに息づいている。あたしがこの本を食べているんだ。それはあたしが本に食べられているということでもあるけど。

『世界の果てにあたしがいて、いつかいつかとあたしのことをまっているんだ。』
いつものように書いてみる。黒い文字が、あたしを吸い取っていく。

『サイコロ遊びは好きですか。だれが、サイコロのどの目が多くでるか知っているのですか。どの目が多く出るのでしょうか。一・二・三・四・五・六。数学でした記憶があります。確か、どれも同じ。そう、すごく簡単なこと。どれも同じ。でも、それは真実でしょうか。あたしはどう、たとえば、どの目も千回ずつでたとして、次の目はどれがでるか同じなのでしょうか。そう、でも次の目は確かに三でした。これはどういうこと。どの目がでるか同じなのに、三が出るとはね。コインも同じ、裏と表どちらも同じようにあたしの方を向くけど、でも向いているのは表。そうイルカばかり。』

二十

　ぼーっと縁側で寝そべっている。少し気が引けたので、座ることにした。赤いサンダルを履いて、足をぶらぶらさせてみる。このサンダルどこまで飛ぶのだろう。右足を力いっぱい振り上げる。サンダルは真上へあがる。記録、五十センチ。もう一度、履きなおす。こんどは、前に飛ぶように足の甲をそらせている。力を抜いた感じにサンダルを放つ。サンダルはくるくる回転しながら、道の方へ飛んでいった。記録、十メートル。左足でけんけんしながら、サンダルを拾いにいく。けんけん。
　「何しとるの」
こころの声がした。
　「ちょっとねぇ」
　「遊びにいかへんか」
　「ええよ」
　こころの家までそのままいった。ジーパンにＴシャツにサンダル、まあいいか。こころの車にのって、出発。今日は軽のミッションです。こころが、ギアを変えるたびに音がする。
プシューって。ターボがついてるから、加速がいいです。坂道でも、なんてことありません。らくらく走ります。
　「どこに行くの」
こころに聞いてみます。
　「どこに行くのかなぁ、ちょっと遠いかも」
高速道路にのります。高速道路っていっても片側一車線のところがほとんど。それから、山陽道にのります。こころは西へ車を走らせています。
　「ここどこなん」
　「岡山やないの」
家を出てから、そろそろ２時間。パーキングに入りました。
　「腰がいたい。やっぱ軽はつかれるわ。レガシィにしといたらよかった」
こころは、そんなこと言ってます。あたしは、地図でここがどこなのか知りました。赤いサンダルが気になりだしました。
　「ソフトクリーム買ってよ」
　あたしはこころに飛びつきました。
　「わかった」
あたしはご機嫌です。ソフトクリームはおいしいです。体が熱いから、冷やしてくれます。疲れも少し飛んで、眠気も少し飛んだ。飛んでけ。
　「そろそろ、行こうか」
こころは、エンジンをかけます。なぜか、こころの左手があたしの太ももに手がふれました。
ええー？
　「ごめん」
こころもビックリしています。あわてて、左手をあるべきところに戻しています。
　「ごめん」
再びこころは謝っています。ギアチェンジがなんだかぎこちないです。
　「寝てていいよ」

そういわれたので、あたしは、シートを倒して目を閉じることにしました。エンジンはうなり声を上げています。こころは、音楽のボリュームを下げていきます。
　どこにいくのかな。あたし、何にも持ってきてないや。目を閉じたら、思考がだんだんと遠のいていきます。記憶もだんだんと遠のいていきます。

夢と現の境目をさまよいながら、何百キロも移動してました。
　「到着」
と着いたのは、どこなのでしょうか。どこなのでしょうか。とりあえず、海が見えました。
　「降りるぞ」
こころは、あたしのあたまを揺らすと、車を降りていきました。あたしもこころのあとに続きます。目は半開きで、体は重たいです。駐車場を抜けて、砂浜の方へ、こころのあとを追いかけていきます。こころがおもむろに立ち止まりました。あたしはこころの右側にたってこころを、見ます。こころは海のほうをみています。あたしも。
　「海が青い。海が青い」
あたしは、そうこころに微笑みかけます。こころは、うんうんってうなずいています。海が青い。透き通った青のグラディエーションが、心を突き抜けていきます。
　こころが右手をあたしのあたまにのせます。海がモノクロに変わりました。青さの残像が、心をとらえています。こころは、目を見開いて海を見ています。モノクロでも、海はきれい。こころが手をのけると、また青が戻ってきました。こころは、少しさびしそうな顔になりました。
　「もう行くけどいい？」
　「いいよ」

　一時間ほど、走ったところで、こころはガソリンをいれています。道の駅ですこし休憩。そろそろ日も傾いてきました。
　「もう少しやから、迷ってはないから大丈夫」
ええー、迷ったの？まあいいか。
　あたしは、ずーっと窓の外を眺めています。あたしの家の周りと大差ない光景が広がっています。でも、結構いい道路を走っています。
　「たぶん、こっちやとおもうんやけどな」
こころが、つぶやいています。大丈夫かな。少し心配になってきました。

　「あそこに車とめよか」
何とか、目的地までたどりついたみたいです。こころはパーキングに車を止めて、なにやら電話をしています。
　「とりあえず、こっち」
あたしは、こころの後をついていきます。道路を挟んで、旅館に、居酒屋、おみやげ物屋、いろいろ並んでいます。
　「ここで、一休み」
と、こころは、慣れた感じで靴を脱いで、靴下を脱いで。なにやら湯船に足をつけ座ってています。
　「足湯、サクラも入りーよ」

「うん」
あたしは、サンダルを脱いで、こころの左側に座ります。気持ちいい。ぬるい感じがきもちいい。
「もうちょっとしたら、京子が迎えに来てくれるとおもうから」
「きょうちゃんが迎えに来てくれるんや」
こころは、目を閉じて、腕組みをしている。あたしは、こころのあたまを撫でてみた。特に反応は無い。左手で撫でるので、ぎこちない。
「そうそう、今日ね、京子とケンとナオさんといてるんよ」
「ふーん」
そういうことか、そういうことね。話に聞けば、あたしを連れ出そうと計画したらしいが、なかなか、場所が決まらなかったらしく。去年の夏と冬に行った、山口県となったらしい。夏は昼に見た角島というところでキャンプをして、冬はここ湯田温泉にふぐを食べにきたらしい。冬は、直緒さんの競馬が当たったとかなんとかだったみたいだけど。ふぐ食べたいと言ったのは、きょうちゃんだったみたい。あたしもふぐ、食べたかったな。というと、今日は無理やなって言われた。どうも、ふぐは冬の食べ物らしい。
「どーこー」
電話の向こうからきょうちゃんの声が聞こえてくる。
「足湯におるで」
こころは目を閉じている。疲れているみたい。あたしはまだ、車に乗っているみたいな感覚。あたまの中で、ずーっとあたしは車の中にいる。からだも、車の中にいる。頭が少し痛い。額から汗が出てきた。

きょうちゃんの顔ばっかり見ています。どうしてあんなにばしっと笑えるのでしょうか。きょうちゃんとお酒を飲むのはこれで、二度目。あたしの隣にきて、いっぱいお話してくれます。ケンは直緒さんに怒られています。なんか、サッカーの試合でへまをしたことを掘り返されています。「なんで、あそこでパスせんかな」とかね。こころは、それを隣で見ながら、げらげら笑ってます。ケンは怒られキャラなのかな。この前も怒られてた気がします。
焼き鳥が出てきました。
「ふぐ食べたーい」
ときょうちゃんは、言ってふぐのから揚げを頼んでいます。お酒が運ばれてきて、それでこころはいつものように、店員のじょうちゃんの方ばかり、そんなの見なくてもきょうちゃんも、あたしのいるのにね。どうせなら海南もいればよかったのに。でも、関係ないや。あしたになれば忘れているだろうから。
「あたしも、ふぐ食べたーい」
きょうちゃんの真似して言ってみました。
「さっき頼んだから、一緒に食べよー」
きょうちゃんが言ってます。ぶーぶー。あたしは、から揚げじゃなくて、刺身が食べたいの。
でも、口には出しません。きょうちゃんと一緒に食べればいいかな。

二十一

　くるくる回ってキャッチ、くるくる回ってキャッチ。ボールを天に向かって投げて、くるくる回ってキャッチ。
　「もう、投げてもええぞ」
こころがグローブを上げながら言った。あたしは、軽くボールを投げる。こころのところまで、ボールをおとどけ。こころは手前でワンバウンドしたボールをキャッチ。あたしの方へ山なりの軌跡を描くように投げる。あたしは左手を差し出して、グローブにいれた。白い軟球をつかんで、投げる。こころは手を伸ばして頭の左上でボールをとる。ボールを握りしめてあたしに投げ返してくる。山なりのボールが帰ってくる。
　近頃、だいぶ勉強に慣れてきた。まったく勉強してなかった三ヶ月があるせいで、何からはじめたらいいのか迷っていたが、まあ基礎からはじめるしかないなと諦めてやっている。海南とは予備校に行けば出会う。たまに話はするけど、基本的にあたしは人とつるむのはやめにした。あたしがどこかへいってしまいそうになるからだ。
　「勉強はどうなん」
　「まぁ、しよるよ」
　頭の中を記号と数字が巡っていく。こころが来るまでは、積分の問題を解いていたからだ。その断片が浮かんでは消え、消えては浮かびと、揺れている。右手で、ボールをつかんで、投げる。左足を大きく上げて前に踏み出す。プロ野球のピッチャーを真似て投げる。あたしの頭のなかはいろんなものがぐるぐる回っている。ぐるぐる回りすぎている。大学受験の焦り、勉強ができる嬉しさ、予備校のこと、数学の問題。それらが一緒になってぐるぐる回っている。
　あたしはあたまで考えるのではなく感じていたい。何を感じたいのか、それはこの受験という特別なことだ。大人になる前に乗り越えたい。でも、もう大人なのかもしれない。高校卒業してしまったし。大学で人生が決まる。それは本当なのだろうか。高校のとき先生が言っていたな。「受験なんて自分の努力しだいでどうとでもなる、社会に出たらそんなことは絶対ない。受験なんて簡単だ」とか、何とか。
　グローブにボールが入る瞬間に目を瞑ってしまう。目を瞑ってもボールはちゃんと入っている。こころの方を見ると、こころは少し傾いている。あたし方を見ているのだけど、あたしを見てないという感じ。ボールを投げれば、返ってくるのだけれど。
　「海南って、かわいいね」
こころはそんなことをさらっと言った。
　「あたしは？」
あたしはそう問い返す。
　「サクラはかわいいね」
　「きょうちゃんは？」
　「京子はかわいいね」
　「海南は？」
　「海南はかわいいよ」
　「みんなかわいいの？」
　「そうみたい」
あたしは、大きく振りかぶってボールを思いっきりなげる。力がいっぱい腕をふる。ボールはあ

たしの手を離れ、こころの方へ飛んでいった。あたしは少し肩が痛い。ボールはどんどんこころに近づいていく。どんどんこころに近づいていく。どんどん近づいていく。そしたら、こころの手からすっとグローブが落ちたんだ。こころは素手で、ボールをつかんだ。

「サクラいい球なげるやん」

そう言って、微笑んでいる。こころはグローブを拾うとあたしの方にボールを投げ返した。前よりも高い山なりのボールが返ってきた。

二十二

　振り返れば、人ごみの中に海南がいる。隣にきょうちゃんもいる。あたしは、海南と目があった。海南が隣のきょうちゃんにあたしの場所を伝えた。きょうちゃんは、手を振ってあたしのことを呼んでいる。あたしは、少しだけ手を上げてきょうちゃんに答えた。
　「勉強忙しいにのごめんねぇ、でもたまにはこういうのも必要やろ」
きょうちゃんは、あたしの方ばかり見てそう言った。海南は、私に会ったときと同じこと言うなよ。とでも言いたげな顔をしている。海南は少し笑っている。
　「きょうはあたしがおごります」
きょうちゃんは、太っ腹ですねぇ。
　「おぉー」
あたしと海南は声をそろえてそんなことを言う。なんだか、声がそろってしまって、可笑しかった。
　「そろったやん」
きょうちゃんは、そう突っ込んで、あたしと海南の顔を交互に見た。
　「じゃあ行こか」
きょうちゃんは、歩みを進める。人の行き交う間にあたしたちは入っていく。しばらく黙っている。しばらく、きょうちゃんについて行った。そして、お店に入った。
　あたしは、きょうちゃんの隣に座った。海南はあたしたちの対面に座っている。すこしするとこころがやってきて、海南の隣、あたしの前に座った。これで完成。
　こころはビールを飲み始めた。きょうちゃんもビールを飲み始めた。酔っ払いが二人。あたしは、飲む気にならなかった。海南はお酒は飲まない人みたいだ。
　「京子とサクラって姉妹みたいやな」
こころはそう言い放った。あたしは嬉しかった。そんな風にこころが思っていることも、きょうちゃんが「ほんと。そう」っていったことに対しても。
　「じゃあ、うちとこころが兄妹？」
海南の声がこころに届いた。
　「えーどうかな、ちょっと違うかも」
きょうちゃんは、反射的にそう言った。声がこころに届いている。
　あたしはいつもだれかの真似をしている。だれかの真似をして安心しているんだ。考える前に真似ている。場の空気とでもいうものが、それを求めているからかもしれない。だれかに近しいことが、平穏に繋がる。
　こころの声はだれかに似ている。だれに似ているのかは、わかっている。海南はから揚げをひとつ箸でとって小皿に移した。あたしも同じようにお皿に移した。こころも、きょうちゃんも。から揚げはおいしい。こころがビールのジョッキを開けると、いっぱいに入ったジョッキが出てきた。同じものが運ばれてきた。
　「サクラも飲んだらええのに」
こころはあたしの方にジョッキを平行移動させた。あたしは、口を尖らせている。
　「まあ、ええか」
こころは自分の分のビールを頼んだ。これが答えなのかもしれない。あたしは、ほんとうは飲みたかったのだろう。昨日と今日覚えた英単語が全部吹っ飛んだ。あはは、あたし駄目な人です。

きょうちゃんのグラスとあたしのジョッキを当てあう。何か特別な意味があるみたい。あたしが飲んだのはそのいっぱいだけ。こころは、何杯のんだのだろうか。
　あたしはきょうちゃんの方を向いて、べーって舌をだした。あたしの舌は人より伸びる。それをはじめてみたきょうちゃんは
　「なんで、そんなに伸びるん」
と驚いていた。
　「もう一回やって」
きょうちゃんが言うが、あたしは
　「だぁんめぇ」
としか言わなかった。こうなることは予想済み。ちなみにほっぺたもつまんで伸ばすと、人よりか伸びるけど、ほっぺただと、だれでもつまめるから、しなかった。だって「だめ」
っていう台詞が言えないじゃないですか。そうそう、「断る」っていう言葉もいいよな。あたしの舌のことはすぐに忘れられた。それでいい。すぐ忘れられる話題がいい。
　こころが海南の頭を撫でている。海南の視界はモノクロになっているはず。こころにはどんな色が見えているのだろうか。こころは不敵な笑みを浮かべながら、斜め上を見ている。あたしにはこころの喉元がはっきりと見えた。左目だけが見ている。こころは、ゆらりと手をのけて、目を閉じた。こころは席をはずした。あたしは、こころの後ろ姿を見送った。きょうちゃんの顔を見たくなってこころのいた席に移動。きょうちゃんの目には影がかかっている。海南はなんだか上機嫌だった。モノクロのことは何も言わなかった。
　「このままこころおいて帰ろうか」
きょうちゃんがそんなことを言い出す。あたしは、賛成したいけど。ふと海南の方をみる。海南は満面の笑みでうなずいている。でもね、座ったまま、あたしたちは動きませんでした。軽い冗談ですよ。

　お酒のせいで少し頭がいつもと違う。言葉のめぐり方がいつもと違ってくる。なぜに、あたしはここにいるのだろうか。なぜに、あたしは、大学など受験しようとしているのだろうか。答えはわからない。それに、大学行ったところで何かになれるわけではない。あたしは、だれかと同じことをして生きるのだろうか。だれかと同じことをして、何となくだれかに認められて、自分の居場所を見つけて、それだけに満足して、訳のわからぬ事をしながら死ぬまで生きるのだろうか。くだらないことをして生きるのだろうか。ほんとうにくだらないことをして生きるとしたら、滑稽だ、滑稽以外のなんとも言いようがない。ホントに。隣には海南がいる。海南はどんなことを思いながら、受験に向かっているのだろうか。海南の目はまっすぐで、ぶれていない。どこか思うところがあることだけが分かる。だれにもそれは話さないだろうけど。
　「うちの好きなことはねぇ・・・、ねぇ聞いてる」
　「聞いてる」
　「うちの好きなことはねぇ、ない」
そんなあほなことを言っているきょうちゃん。どうしたんだろうか。でも、あたしの答えはでないよな。ありきたりのものが、とてつもなく駄目なものに思えるから、だから側にあるものからは出てこない。いっそう、だれもいないところで暮らそうかな。
　きょうちゃんの目はもうほとんど閉じられていて、きょうちゃんは右目を少しだけあけている

だけで、舌を出しながら、あたしと話などをしている。ことあるごとに、「眠くない」と言い張るが、どうも怪しい。
「うちの、うちの、・・・・」
きょうちゃんは美しい。
頭の中に浮かんでは消える、記憶の欠片。幾つもの塊が、バラバラと横たわっている。あたしはそれらを外から眺めているだけ。記憶の欠片を集めたりはしない。きょうちゃんの右目も閉じてしまった。あたしは、右手できょうちゃんの頭を撫でてみた。こころがあたしの方を見ていた。あたしの見る世界はモノクロではなかった。モノクロにはならなかった。きょうちゃんは何を思って生きているのだろうか。きょうちゃんは自分がどこにいるか知っているのだろうか。それに、何処から来て、何処に行こうとしているのか、知っているのだろうか。でも、それはあたしが知らなくていいことだ。あたしが知らないといけないことなんて何もない。ただ、あたしがいるという事実だけがわかればいい。あたしは、どうなるんだろうか。あたしは、どうしたいんだろうか。きょうちゃんの頭はあたしの手を離さない。

家に帰るとあたしは黒い本を広げて書き始めた。
『あたしは一体どこにいるのだろうか。世界のどのへんにあたしはいるのだろうか。世界はどんなくらい大きいのだろうか。地球のことは地図に書いているけど、あたしのいるのは宇宙という世界。それは変わらないはずの世界。その世界のどこにあたしはいるのだろうか。考える。考えるけど、全く想像が出来ない。あたしはこの家のどこにいるのだろうか。それすら上手く想像できない。あたしがどこにいるのかはあたしも知らない。空は澄んでいたけど、どこまでも見えるきはしなかった。あたしは何処まで見えているのだろうか。どこまで見えれば、見たいものが見えたことになるのかな。まだまだ遠くを見たい。もっと良く見える目が欲しい。もっともっと良く見える目が欲しい。
いや、べつにいらないや。良く見える目なんてあっても、どうにもならないから。
こっけいだな。滑稽だ。全く反対のことを同時に望んでいる。どちらに、転んでもいいようにかな。どうだろうか。何を書けばいいのだろうか。世界は広い。それだけは確かだろう。あたしが駆け回るには広すぎるだろう。どう世界と向き合うのだろうか。あたしは、この世界をどう思っているのだろうか。疑問を書けば、答えがでるのだろうか。疑問を解けば、あたしには平安が広がるのだろうか。答えは知らないけど、答えはどこにでもある。聞こえないのは空の声。それだけ。
その、ここ、すぐ、ここにあるはずのことなのに、でも、声が聞こえないわけではないな。すぐそこにあるはずの、世界の欠片。どんな世界であっても、あたしはこの世界からは逃れられない。
意識は、高いほうがいいのかな。そう、誰みたいに？きょうちゃんみたいに？それとも海南みたいに？あたしは、だれみたいになりたいのかな。だれみたいに、あたしのとうさんみたいに？あたしのかあさんみたいに？そう、あたしはあたしみたいになりたい。あたしはあたしを溶かして、あたしになる。あたしがあたしのなかをグルグル回って、あたしになる。そして、そしていつか消えていくのだろう。きっと、きっと。こころみたいなあたしがそこにいたのだろう。打ちひしがれる気持ちに、世界をこめて。明日、明日、きっとこの世界を越えて駆け回れることを信じよう。

　言葉なんて水みたいなもの、いろんなところを流れ、地球を巡る。言葉は時代を巡り、そして生まれたところにまた戻ってくるのだ。
　あたしの言葉なんて、一瞬の思い込み。あたしの言葉なんて、些細な気の迷い。あたしが永遠なんて言葉を口にした瞬間に、永遠が価値を失う。』
「なんてね、寝てていいよ」

　あたしは生きるのが好き。あたしは考えるのが好き。言葉を使っていろいろ考えるのが好きなのだ。何の為に考えるかはわかりきっている。それがあたしの生きることだから。考えることがあたしの生きる場所。そう、考えること事態があたしの生きる場所を作り出しているんだ。この世界は器、あたしを入れる器、でもあたしが感じるのはその器ではない。器ではなく、考えることにより生まれたあたしの場所。あたしの場所、そう君への場所。あたしは、考える、そしていつかの人が言っていたことも学ぶんだ。記憶が消えないように、ここがあたしの生きる場所。
　さぁて、わかっているよね。何をすればいいか。何をすれば、あたしが生きれるか。わかっているよね。わからないわけないよね。
　世界はまだまだ、広がるよ。どんどん、どんどん変わっていくよ。そう、そう、そう。
　あたしは夢をみた。あたしは現実にいた。あたしはだれかに抱きついている。だれにだきついているのだろう。メガネをかけたおにいさんがいる。メガネをかけたあたしがいる。あの人はだれ？だれでもいいか。だれでも、いいや。おにいさんは仰向けに。目を閉じて寝息をたてている。あたしはおにいさんに顔を近づける。おにいさんの目がゆっくり開いて、ゆっくり閉じた。あたしはどんどん顔を近づける。メガネのふちを、メガネのふちに引っ掛けておにいさんのメガネをはずした。あたしのメガネも一緒に落ちていった。あたしはおにいさんに唇を近づけた。その唇をいとおしく受け入れる。あたしの歯とおにいさんの歯ががちがちあたった。なんだか可笑しかった。おにいさんは世界を見ていた。あたしは、抱きしめられたのが嬉しかった。記憶の片隅で、こころが笑っていた。遠くで笑っていた。こころが、言葉を出して笑っていた。
　記憶が現実へと繋がった。あたしは夜の中にいる。あたしは、目を開けない。まだ、夜中。なぜか頭が冴えている。でも、しばらくしたらまた夢をみるだろう。

　世界がどこにいくなんてわからないけど、あたしは確かにこの世界に生まれて、いまここにいるんだ。ここがどこだか分からないけど、そんなこと気にしない。いるということだけ分かればいい。そして、この世界で生きていくんだ。
　何をするのか、何になるのかなんて分からないけど・・・。

二十三

　雪は降っているけど、きらいじゃないな。あたしは、去年もこの教室でセンター試験をうけたね。何回目？これが最後やな。これが最後かな。黒い本に手を当てる。きっと大丈夫。

　星がきれい。あたしの心は澄んだ。試験があたしを洗ったの。あらったの。昨日と今日、そして明日は全く別の日。

終わり

　ランチ、ランチ、久しぶりのこころとランチです。あたしは朝からうきうき。もうすぐ桜の咲く季節、でも冬の名残のように寒空が広がっている。そんな中でも広がるものがあります。
　赤いサンダルがあたし。どこまでいっても、帰ってこれるように、足跡をつけてくれます。地面に印をつけてくれます。記憶、記憶。記憶の中にだけ、いつものように足跡をつけてくれます。忘れているのではなく、ただ思い出さないだけ。どこを歩いてきたかは全部分かってますよ。それに、これからどこにいくかも。でも、いまはランチが楽しみ。サンダルは、あたしのことどれくらい知っているのかな。どれくらい知っているのだろう。全部知っているだろう。ただ思い出さないだけ。それに黒い本に書けばすべてが等しくなる。考えることで季節が巡っていく。
　こころは、昨日より年老いていく。あたしも年老いていく。それに、世界も年老いていく。モノクロはどうなるのだろうか。あの目はどこにあるのだろうか。こころがいなくなれば、だれかに受け継がれていくことになるのだろうか。それとも、失われるものなのだろうか。世界は色で溢れている。
　「そろそろ行こか」
こころの声がする。
　「うん」

　『こころと食べるランチはいつも、こころのおごりだかんね。こころ、いつもごちそうさまです。』

　ランチの後、空を見た。
　「見えたか」
　「見えた、ありがとさん。ちゃんと最後まで大学行けよ」
　空には虹が架けている。あたしのあたまの上にこころの手が乗っている。あたしの目には虹はみえない。あたしの目にはモノクロが見えているから。

おわり。